
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 10

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 181.読者の方から寄せられた質問事項(No.5):山口課長の言葉を繰り返す室積さんの意図
- 182.読者の方から寄せられた質問事項(No.6):発達段階5を超えた世界～ポスト・ポストモダニズムへの視点
- 183.読者の方から寄せられた質問事項(No.7):「発達段階5の影と闇」「発達理論が持つべき当為へのパス」等
- 184.読者の方から寄せられた質問事項(No.8):構造的発達心理学の新しさの所在
- 185.祖国を離れる日を想う:喪失と獲得の狭間で
- 186.遙かなるフローニンゲン
- 187.嘔吐
- 188.三十路からの理科系研究者への転身:フローニンゲン大学留学までの経緯
- 189.「コトバだった」
- 190.フローニンゲン大学での修練:一年目のプログラムに関する概略
- 191.ゼミナール受講生からの質問:スポーツと発達理論
- 192.フローニンゲン大学での修練:一年目のプログラム内容(その1)
- 193.フローニンゲン大学での修練:一年目のプログラム内容(その2)
- 194.フローニンゲン大学での修練:一年目のプログラム内容(その3)
- 195.Lectica時代の回想:発達測定手法の開発プロセスについて
- 196.知性・能力発達に関するカート・フィッシャーの五つの段階モデル
- 197.顕現する美
- 198.アメリカの国家諜報機関で重宝されていた発達測定手法の質
- 199.愚直なまでにただひたすらに
- 200.キャリア段階ごとの職業人の自我と能力の発達

181. 読者の方から寄せられた質問事項(No.5):山口課長の言葉を繰り返す室積さんの意図

質問:室積さんが、事あるごとに山口課長の言葉を念押しする形でおうむ返しにも近い発言をすることには、どういった意味があるのでしょうか。

回答:その点に気付いていただき、大変有り難いです。結論から先に述べると、室積さんの意図は、山口課長の発話を安易に受け流さず、発話内容のみならず、山口課長の存在それすらも自分の内側に取り込むことにあります。

要するに、他者の存在それ自体を引き受けることによって初めて、意義のある問いを発話者に投げかけることができる、という対話原則を室積さんは持っているようです。

また、「会話」というのは「誤解の産物」と形容することができるぐらいに、発話者と聞き手がお互いに理解した振りをしながら成り立つものであると言えます。しかし、発達支援を意図した「対話」では、誤解の連続プロセスに風穴をあけるかのごとく、発話者の発言内容を真摯に受け止めことが不可欠になります。

発話内容を真摯に受け止める手段の一つとして、室積さんは山口課長の発言内容を繰り返していると言えます。

さらに興味深いのは、発達支援コーチングに携わる私の経験からすると、発話者の発言内容を繰り返すことによって、発話内容の誤解を防ぐことのみならず、繰り返しを受けた発話者は往々にして新たな意味づけを行っていきます。

私たちは会話の中で、思考内容をすべて発話するとは限らず、何かを省略したり、あるいはその瞬間においては内容が不明瞭なまま発話することが頻繁にあります。そのため、いったん内容を確認することによって、発話者が言い残していたことや不明瞭なものを明瞭にするためのスペースを与えてあげることは、発話者の意味構築作業を手助けすることにもつながります。

上記のような意図を持って、室積さんは山口課長の発言内容を繰り返していたと考えられます。

実はそれ以上に、対話に関する私自身の個人的な原体験が室積さんの対話のあり方を決定づけていたようにも思います。私は、ジョン・エフ・ケネディ大学大学院に在籍していた時、一年間ほど「ボームダイアログ」と呼ばれる対話グループに毎週参加していました。

ボームダイアログとは、理論物理学者のデイヴィッド・ボームが意識の探究、とりわけ人間の対話を探究した末に編み出された対話実践です。その実践は、秘教的にも映りますが、究極的には対話を通じて、お互いが共有する集合意識にアクセスし、そこを立脚点としてお互いが意味を交換し合うことを目的にしているのだと思います。

こうしたダイアログを実践するグループに毎週一回、一年間参加することによって、対話の表面的な技術を超えて、対話には深淵なものが宿っていることに気づかされました。そのような私の実体験が室積さんの対話のあり方に色濃く影響していたのかもしれませんが。

【回答に対して質問者の方から頂いたコメント】

傾聴という以上に、相手の存在そのものまでも自分の内側に取り込み、それによって室積さんは意義のある問いを山口課長に投げ掛けることができ、彼の意味構築活動の手助けまでしている、ということですね。

こういった室積さんの態度は、コーチングの場面ではもちろん不可欠だと思うのですが、われわれの普段の生活でも見習うべきものだと思います。室積さんのように実際に発言内容を正確に繰り返すことは難しいにしても、室積さんの「対話」に臨む姿勢は、日常生活での「会話」における指針として非常に示唆に富むものだと思われたのです。

ここで我が身を振り返れば、室積さんの態度とは対照的であったことに気づかされます。過去の「会話」場面において、何処に私の基本的な関心があったかといえば、やはり相手の発言について“自分が”どう思うか、考えるかであり、また、それに対して実際に“自分が”どう切り返すか、だったと思います。関心事はあくまで“自分”なのです。しかも、相手が掛けている眼鏡にも自分が掛けている眼鏡にも気づいてはいません。

言うまでもありませんが、そういう態度には、既に相手の発言内容に対する恣意的な取捨選択が働いており、また自分の思考や感情に意識の焦点を合わせているので、多かれ少なかれ相手の話を聴いちゃいない訳です。そして、大体において、相手の側でも自分と同じような姿勢で会話に臨んでいると思うのです。そうすると、会話はややもすると、モノローグ的な「問いかけ無き答えの応酬」に終始し、加藤さんのおっしゃるように、「誤解の連続のプロセス」の完遂というむなしい結末を迎えることになるでしょう。

悲しいことに、これが、私が日々交わしていた「会話」というものの正体だったのかもしれませんが……。まさに他者不在、室積さんの風上にも置けません。

相手を足掛かりに自我を肥大させることに関心が向きがちな「会話」と、相手の存在そのものを引き受けることで相手を変容させうる「対話」、いや、ちょうど室積さんが身をもって示したように、相手のみならず自らをも変容させうる「対話」という営みには、他者の他者性に対する配慮・尊重という点において雲泥の差があるなど痛感させられました。それとともに、実りなき「会話」を超えて、室積さんのように他者の存在をも引き受けることを目指す、真摯な「対話的会話」を実践していきたいと思いました。

182. 読者の方から寄せられた質問事項(No.6):

発達段階5を超えた世界～ポスト・ポストモダニズムへの視点

拙書『[なぜ部下とうまくいかないのか:「自他変革」の発達心理学](#)』について、新たに頂いたご質問を紹介したいと思います。今回のご質問は、発達段階5を超えた世界に関するものであり、この論点は他の読者の方も関心を持っておられるのではないのでしょうか？

質問: 発達段階3がプレモダンに、発達段階4がモダンに、そして発達段階5がポストモダンに対応しているかと思います。構造主義発達心理学が構造主義的であることを自認しているのかどうかは分かりませんが、構造主義心理学は自らを超えていく、つまり、ポスト・ポストモダニズムへの超脱の道を模索しているのでしょうか？ 具体的には、発達段階5を超えるような段階を想定しているのでしょうか？

回答:結論から述べると、様々な構造主義的発達心理学者が段階5を超えるような発達段階を提唱しています。以前、ロバート・キーガンに話を伺ったところ、キーガンも発達段階6を想定していると述べていました。ただし、発達段階6に到達している人を発見するのは非常に困難であり、サンプル数が少なくないというのが悩みの種です。その結果、発達段階6の特性を説明しようとする、どうしても推測的な記述に陥りがちです。

現存する著名な構造主義的発達心理学者の中で、成人以降の高度な発達段階を探究している研究者は10名ぐらいしかいないと思いますが、キーガンに師事していたスザンヌ・クック・グロイターは優れた研究成果を報告しています。彼女は、発達段階5、5/6、6の特性を明らかにし、その研究成果をまとめた論文を参考のために最後に記載させていただきます。

発達段階5を超える高次の発達段階を探究している研究者の中で、観点が面白いのは、ハーバード大学医学部のマイケル・コモズです。コモズの段階モデルは、キーガンの段階モデルが扱う発達領域と少し異なり、自己意識の発達というよりも純粋に認知的発達(どれだけ複雑・抽象的な思考ができるか)を扱っています。

キーガンの段階モデルと対応させる形でコモズの段階モデルを説明すると、発達段階5に該当する段階では、多様なシステムを俯瞰的に捉え、それらを統合する新たなシステムを構築できる、というような「メタシステムの思考」ができるとされています。

そして、発達段階6に該当する段階では、多様なシステムや複数のメタシステムがそもそも何に立脚しているのかを掴むことができる、というような「パラダイム的な思考」ができると想定されています。最後に、発達段階7に相当する段階では、複数のパラダイムを比較検討することができる、というような「パラダイム横断的な思考」ができるとされています。

ダーウィンやアインシュタインのように高度な認知的発達を遂げた人物であっても、上記のコモズの段階モデルでは段階5から段階6の間に落ち着きます。また、私がマサチューセッツのLecticalに在籍していた時に調査対象となっていたCIAやFBIの捜査官の中で、最も高度な知性を発揮してい

る人でも段階5を少し超えているぐらいのレベルでした。そう考えると、上記のモデルはかなり推論的であり、あまり実用性がないかもしれません。

参考文献

- Cook-Greuter, S. (2005). Ego development: Nine levels of increasing embrace.
- Commons, M. (2008). Introduction to the model of hierarchical complexity and its relationship to postformal action.

183. 読者の方から寄せられた質問事項(No.7):

「発達段階5の影と闇」「発達理論が持つべき当為へのパス」等

これまで182個の記事を書いてきましたが、今回の記事は、その中でも最も重要なものだと思っています。その理由の一つ目は、「私は発達理論というものをどんな想いに基づいて何のために探究しているのか？」という問いに対する自分なりの思想がこの記事の中で露わになっているからです。

二つ目の理由は、「発達理論が内包している限界性とはどういったものなのか？」「発達理論が前面に打ち出していくべき方向性とは一体どういうものなのか？」という論点についても紹介することができたからです。

発達理論に関心を持ってくださっている多くの方にぜひ読んでいただきたい記事です。

主な掲載論点

- 1: 発達段階5の影と闇
- 2: 高次段階崇拝性向
- 3: 段階5を超克するための発達課題「シニシズムとの対峙」
- 4: 発達理論が語る「実証特質」と語らない「規範特質」
- 5: 発達理論が持つべき当為へのパス
- 6: 「発達善である」という思想に伴う「前・超の虚偽」

質問:人間にとって、発達や成長がかならずしも幸福や善であつたりしないのだとすれば、発達段階5にもそれなりの限界性や病理性があるかと思ひます。しかも、より高度な発達段階であれば、その闇もより深くなるように思ひられます。輝かしい発達段階5の影には、どのような闇が潜んでいのでしょうか。

回答:発達段階5の特性が強まってくると、相互発達のたろうとすることによつて生じる固有の癒着現象が起こりえます。言い換へると、他者の価値観を尊重することから生じる傍観者的な態度が醸成されてしまふ危険性があります。

例へば、学問の世界においては、しばしば「学際的探究」という麗しい言葉が叫ばれ、多様な学問領域を尊重し、それらを架橋するような試みがなされていひます。そうした試みの背景には、学際的な学問を志す段階5的な態度が存在してゐると思ひますが、実際のところ、そうした態度は往々にして実を結びません。

お互いに自分自身の学問領域の盲点を知りながらも――盲点を自覚的に対象化するためには、かなり高度な認識能力を要するため、盲点の自覚化ですら稀な現象かもしれませんが――、他の学問領域と自分の学問領域が持つ固有の価値を尊重しようとするあまり、お互いの盲点を掘り下げて吟味し、切り捨てるべき箇所を断固として剥ぎ落とすことができない、という事態に陥りがちです。

思うに、こうした傍観者的な態度は、発達段階5を超えていかなければ解消されないのではないかと見ていひます。つまり、段階5への移行過程や段階5に到達した段階では、どうしても「他者尊重」という罫に捕らわれ、傍観者的な態度を払拭することができないと考へていひます。これは、段階5に到達する過程や段階5に到達した時に生じる固有の限界や病理だと言へます。

また、段階5に到達すると、確かに認識世界が極めて豊かになります。しかしながら、様々な現象の深層を把握できるがゆゑに生じる独自の苦しみが芽生えてきます。

段階5に到達すると、もはや現実世界の種々の問題が他人事ではなくなり、常に自分の存在と不可分のものであるという認識に至ります。現実世界の種々の問題の根源は大きく深いものでありながらも、さらには、自分の力ではなんともしがたいとわかつていながらも、それと格闘することを強ひるような力が背後からやつてきます。

換言すると、段階5以上の人たちは、自分の存在を遥かに超えた時代精神や社会体制が個人や共同体を脅かすものであれば、それらと闘うことを半ば強制的に課される宿命にあると見ています。自分の存在を凌駕する大きなものと闘うことがほぼ勝ち目のないことであったとしても、それらと対峙し、時代精神や体制の歪みを是正するような闘いに乗り出していきます。

これは、当人の意図を超えて生じることであり、そうした闘いに挑まざるをえないことは、実存的にも精神的にも相当過酷なことだと思われます。段階5に固有の闇や影は、もはや属人的なものというよりも、集合的な闇や影と重なり合い、かなり実存的なものであると言えます。

また、これは段階5の闇や影というよりも、段階5の人を取り巻く人たちの闇や影と言えるかもしれませんが、どうも高度な認識能力を獲得している人物を崇拝するような傾向が、人間の中に本質的に備わっているのではないかと見ています。

つまり、神を盲目的に崇拝するのと同様に、高度な認識能力を有する人物を盲目的に崇拝するような傾向があるように思うのです。しかし、構造的発達心理学の枠組みが開示する真実は、単に各発達段階が持つ「実証的な特質」であって、「規範的な特質」ではありません。

実証データを精査してみると、そこには多様な質的差異が見られ、それを構造として区分けした結果が各発達段階の実証的な特質になります。しかし、構造的発達心理学の問題は、それらの各発達段階が持つ特徴を明らかにするだけであり、その内容の真偽は問われないことにあります。

簡単に述べると、構造的発達心理学は、段階5の人の行動論理を説明することはできるのですが、その人の行動や発言が道徳的・倫理的に正しいものなのか、という規範的な特質を一切説明することができないということです。

キーガンの測定尺度ではありませんが、私のメンターであるザッカーリー・スタインとカート・フィッシャーという研究者は、ナチスの声明文の段階構造を調査した結果、それが極めて高度な認識能力によって構築されていることを突き止めました。

しかし、言うまでもなく、ナチスの声明文がいかにも高度な段階によって生み出されているとしても、その内容を精査せずに、直ちに信用することは大きな間違いだと思います。高度な認識能力を有する人を盲目的に崇拜することによって、これまで人類は様々な悲劇を経験してきました。

いただいた質問と少し逸脱してしまいましたが、上記は段階5を取り巻く人たちの闇や影、さらには構造的発達心理学が内包する闇や影と言えるかもしれません。

【質問者の方からの応答】

発達段階5においては、自らの価値観との同一化が克服され、それを他者の価値観と同列に眺めることができるようになり、このような変化は他者の受容という側面においては、まさしく一大進歩ではあるけれども、「他者の尊重」が今度は傍観者的態度に帰結する恐れもある、という訳ですね。自己と他者というのは、ほんとうに複雑で深い問題だと改めて痛感させられました。

また、「現実世界の種々の問題の根源は大きく深いものでありながらも、さらには、自分の力ではなんともしがたいとわかっていながらも、それと格闘することを強いるような力が背後からやってきます」という加藤さんの言葉も、非常に興味深いものでした。私の素朴な感想を述べますと、この力と適切に対峙することに失敗すると、「どうせ世の中なんて変わらない」というある種のシニシズムに陥ってしまうのではないかと思いました。これは無理からぬことだと思います。というのも、加藤さんご指摘の通りで、高度な認識能力をもってして世界と自己を眺めてみれば、あまりにも明白たる己の限界性に直面せざるをえないからです。このシニシズムとどう決着をつけるか、というところも発達段階5における大事な課題なのではないか、と考えた次第です。

次に、「構造的発達心理学の枠組みが開示する真実は、単に各発達段階が持つ『実証的な特質』であって、『規範的な特質』ではありません」という記述についてですが、この箇所は、実は私が加藤さんに追加で質問させていただこうかと考えていたトピックと密接に関連しています(いささか論点がずれている部分があるのは承知の上で、このホットなトピックについて所感を述べたいと思います)。

それは、「成人発達理論は、何のために存在しているのだろうか?」という論点です。具体的に述べれば、「成人発達理論は、あくまでデータの分析から抽出した事実を記述することだけがその仕事

であって、いかなる当為への志向性も持たないのだろうか？」ということです。さらに、青臭いとのそりを恐れず言ってしまうえば、「自らの理論を社会に役立てようとするようなパトスを、持ち合わせてはいないのだろうか？」ということです。

多くのポストモダンの思想群と同調するように、成人発達理論も事実の解明に関しては目を見張るべき多くの成果を上げるいっぽうで、「こうあるべきだ」という当為については、少なくとも明示的には語ろうとしません。自らの理論に対しても、成長や発達がかならずしも幸福や善をもたらす訳ではない、意識段階が高いほうが良いという訳でもない、とその価値中立的な立場を鮮明に打ち出しています。

もちろんこのような立場は、「多様性に対するきめ細やかな配慮」という意味においては健全な態度ではあるのですが、理論を実践的に活用していく場面では、どうしても方向性を伴った価値判断が避けられないと思われるので、私が後ろ暗い思い——「差別主義者！」という良心が上げる非難の声——を抱きつつも、いつも首を傾げてしまう部分でもあります。例えば、民主主義社会は、発達段階4以上の市民が構成員の多くを占めない限りは健全に機能せず、せいぜい特権階級の交代の実現が関の山ではないかとか、地球環境問題は発達段階5の人びとによる協同的意識があつてはじめて、根本的な解決への道筋が示されるのではないか、などと考える訳です。

加藤さんの著作に即して述べますと、普遍的真理や本質論については語らないのが得策であるにしても、現代資本主義経済の重要な経済主体である企業社会を、「よりよいものにする＝意識段階を集合的に上昇させる」という価値判断と志向性に基ついて捉え、その目的に向かって思考し行動することに何の不都合があるのだろうか、ということなのです(いや、不都合などないのかもしれませんが)。実際、コーチングの場面では、ある程度当為への志向性が働いているように思えます。

まとめますと、「成人発達理論が規範性を説明しない(できない)のはなぜなのだろうか、方法論的に不可能なのか、価値相対主義者や価値多元主義者の倫理的・禁欲的態度なのか、それとも実は当為への志向性をひそかに模索しているのか、そして、実際のところその当為へのパトスが、実践という回路を通してじわじわと滲み出しているのではないか」ということです。もっと踏み込んで言ってしまうと、いっそのこと当為や規範性の領域に足を踏み入れてしまえばいいのにとあって、なんだかヤキモキしてしまうなあ、ということなのです。これは素人感覚ゆえの幼稚な叫びなのかもしれな

と思ういっぽうで、一抹の真理を見透かした健全な常人的感覚であるようにも思われるので、なんとも歯がゆい気分させられます。

長くなりましたが、以上が、私が回答を読ませていただくまで考えていたことなのです。しかしながら、「高度な認識能力を有する人を無批判に崇拝するような傾向」やナチスの例を示していただいて、なるほどと納得させられました。「より高い意識段階を目指すべきだ」などと安易に規範について語ることは厳に慎まねばならないということ、痛いほどに理解することができたのです。また、当為や規範性について語りえないということは、善なるものの創出について無力かもしれませんが、その無力さゆえに悪に力を付与することもしないという点では、有意味であるかもしれないとも思われます。かといって、規範性について語りうる理論や、善の創出という積極性への憧憬を、私は捨てきれずにいるということもまた事実なのですが。

そういった訳で、事実——「世界とは何か、人間とは何か」——と当為——「世界はいかにあるべきか、人はいかに生きるべきか」——の統合という問題はやはり難しい、という月並みな感想にたどり着いてしまいました。

飛躍しているように聞こえるかもしれませんが、この問題はそもそも志向性をもたない哲学や思想は存在するのか、という論点にまで行き着くことになるかもしれないとも思われます。私がおぼろげに理解しているだけでも、ソクラテスにしてもプラトンにしても、トマス、デカルト、カント、ヘーゲル、キルケゴール、ハイデガー、レヴィ＝ストロース、フーコー……にしても、事後的にのみ判明するのかもしれませんが、やはり固有の当為や規範性への志向性を抱きながら、世界および自己と格闘した人びとだと思います。

【私の応答】

おっしゃるとおりで、「どうせ世の中なんて変わらない」というある種のシニシズムをどのように超克していくのか、というのはまさに発達段階5に突きつけられた大きな課題だと思います。この課題をどのように乗り越えていくのかに関して、逆説的に響くかもしれませんが、そうしたシニシズムの極限的な深みにまで陥ることが大切なのではないかと最近考えています。

構造的発達心理学の世界において、「次の発達段階に到達するためには、その段階固有の発達課題を徹底的に味わい尽くすことが必要である」といういさか安っぽい表現がありますが、これは言い得て妙だと思うのです。高度な認識能力を獲得し始めた時に、歴然と突きつけられる己の限界性を直視することを避けてしまうと、「世界は自分の力で変えられる」というような安直なナルシズムに陥ってしまうことが起きますが、これは段階4への退行現象を助長すると思っています(段階4は段階2とは違う意味で、「自己肥大」に陥りやすいという特徴を持ちます)。一方、歴然と突きつけられた己の限界性に打ちのめされ、「どうせ世の中なんて変わらない」というシニシズムに陥ることは、ある種、健全な発達プロセスなのではないかと思うのです。

私たちは、自らの限界性と真摯に向き合い、乗り越え難い限界性に打ちのめされて初めて、その限界を乗り越えようとするような萌芽が芽生えるのではないのでしょうか。このように考えると、「人間は、曖昧な世界に放り出されている曖昧な存在」であるということに加え、「絶えず己の限界を痛感し、それに打ちのめされながらもそれを乗り越えていこうとするような存在」なのかもしれません。そのため、シニシズムを絶望的なまでに突き詰めることが、次なる段階への突破口になるのではないかと考えています。口では簡単に言うものの、これは非常に過酷なプロセスですよね……。こうしたプロセスを通過することができる人はほとんどいないため、段階5を超える人は極めて稀であるというも納得できます。

次に、「実証的特質」と「規範的特質」に付随した論点である「成人発達理論は、何のために存在しているのだろうか？」について、実は、この論点は現在の私の最大の関心事項です。この論点に強い関心を持った背景には、「発達心理学者の傍観者的な態度」、つまり、明確な規範を打ち立てることをせず、確固たる規範精神を持って現実社会へ積極的に関与することを避けているような態度に憤りを覚えた、ということがあります。

確かに、発達心理学というのは科学の一分野であるため、「真」の領域における探究を第一の使命とするのはわかりますが、多くの発達心理学者は「善」の領域に対して一切無関心のような態度を持っているように見受けられるのです。自らの探究の成果である「真」が「善」とどのように関係するのか、という考察をしている研究者はほとんどいないため——そもそもそうした問題意識を持っている学者は極めて少ないです——、「成長や発達がかならずしも幸福や善をもたらすわけではない」「意

識段階が高いほうが良いというわけでもない」という価値中立的な立場しか取れていないのではな
いかと思っています。

ここに、人間の発達を解明しようとする探究者自身の意識構造の限界が如実に表れていると思うの
です。要するに、自らの探究領域が「真」を司るものであるという確固たる認識と、それが他の領域
である「善」とどのように関係しているのか、ということを考察できるだけ統合的な意識段階を確立
している研究者はほとんどいないということです。その結果として、発達心理学全体の思想傾向が
軟弱な価値中立的な立場を生み出していると見ています。こうしたことを踏まえて、私は明確な価
値判断と志向性を持って、発達理論を現実世界に活用するという覚悟に至りました。

自分自身を振り返ってみると、「発達」に関して理解の仕方に変遷があることに気づきます。インテ
グラル理論における「前・超の虚偽」は、非常に単純ながらも本質を捉えた概念であり、「発達」に関
する理解の仕方にも適用できるものだと思います。どういうことかというと、「発達は善である」
(前)→「発達は善ではない」→「発達は善である」(超)というプロセスを経て、私たちは「発達」という
現象の理解を深めていくのではないかと思います。

ご指摘のように、すべての学問は哲学や思想が関与するという性質上、「志向性」というのは避けら
れないものであり、そうであるならば、発達心理学は「善」に関する徹底的な規範を確立し、そうした
規範精神に基づいてさらなる学術探究とその成果を現実社会に還元すべきだ、という考え方を私
は持っています。

発達理論がこれから日本で普及していく際に、「発達は善である」(前)という安直な思想が必ず蔓
延してしまうことが目に見えていたため、私は書籍の中で、そうした安直な思想を切り倒す「発達は
善ではない」という考えを伝えるようにしていました。しかし、規範性の確立や善の創出を避けると、
必ずや悪に屈する日が到来してしまうと思うのです。悪に屈しないためにも、当為や規範性の領域
に自らを果敢に投げ込み、「発達は善である」(超)という思想を掲げ、明確な価値判断と志向性を
携えてこれからの探求活動と実践活動に励んでいきたいと思った次第です。

【質問者の方からの応答】

『どうせ世の中なんて変わらない』というシニシズムに陥ることは、ある種、健全な発達プロセスなのではないか」「シニシズムを絶望的なまでに突き詰めることが、次なる段階への突破口になるのではないか」というご指摘について。

私がこのご指摘を踏まえて考えたのは、人間の成長の難しさは、絶望を受容することの難しさ、換言するなら、今の発達段階における限界性を思い知ることの難しさに一因があるのではないか(あるいは同義なのではないか)、ということです。少し視点を変えてみるならば、今の自分を満たしている自己愛、自己肯定を脱構築し乗り越えること—これは、「主体が希薄な状態に移行する」ことの別様の表現であるかもしれません—の難しさと、人間が成長することの難しさは、かなり密接に関連しているのではないか、ということです。現代社会のように、自己愛の傷つきに対して極度に敏感な文化の影響下にある場合はなおさらです。この洞察が正しいとすれば、やはり人間の成長とはかなり困難なプロセスであるといえそうですね。

しかも、優れた理論によって発達の道筋が示されており、絶望なるものも先人たちの努力によって理論化されモデル化されている—この段階ではこういう行き詰まりがあるのだと示されている—としても、その絶望は、実存にとってはほとんど未知の真新しい体験としてわれわれを襲うことになるでしょうから、加藤さんのおっしゃるように、「口では簡単に言うものの、これは非常に過酷なプロセス」になると思われます。理論化・モデル化の力を借りつつ、絶望を希釈・弱毒化してから味わおうというのなら、絶望は絶望性を剥ぎ取られ、絶望の本義から乖離してしまい、「絶望的なまでに突き詰める」こともかなわなくなってしまうし。もっとも絶望とは簡単に弱毒化できるような代物ではないのでしょうか。

ここで再び加藤さんのご指摘にハッとさせられるのですが、人間にとって成長や発達とは、「こんなに素敵な新しい私を見つけ出す旅」のような美しいもの麗しいものでは決してなく、それこそ「絶えず己の限界を痛感し、それに打ちのめされながらもそれを乗り越えていこうとするような存在」に課された血みどろの戦いなのかもしれません。極端な表現にも聞こえますが、後者のほうがよほど真実を描写しているように思われます。

そして、こんな闘いに挑む物好き(笑)がいるのだとすれば、いったいどのような人なのだろうか、としばしば考えてみました。いくつものタイプが存在するのですが、それはひとつには、良くも悪くも自

己愛や自己肯定が揺らぎやすい悩み多き人であり、またひとつには、回答で加藤さんが指摘しておられた「背後からやってくる力」の存在を感じ取り、当為への志向性を胸に抱かざるをえない人、他者と自己との間に横たわる深淵に震撼しつつも、その架橋に挑まざるをえない人であり、要するに、善を希求する人なのではないか、という答えにたどり着きました。

安住の地を見出しえず、善へ向かわざるをえないとき、人は血みどろの戦いへと駆り立てられるのだと思うのです。そして、以上の叙述は自己啓発と自己成長の違いを明らかにしているようにも思えます。

次に、「発達理論を現実世界に活用するという覚悟に至りました」「当為や規範性の領域に自らを果敢に投げ込み、「発達」は善である(超)という思想を掲げ、明確な価値判断と志向性を携えてこれからの探求活動と実践活動に励んでいきたいと思った次第です」という加藤さんの決意表明について。

加藤さんの著作には、やはり加藤さんなりの熱情が秘められていたことを知って、いたく感動いたしました。そして、勇ましく真に知的である、という印象を受けました。現代において、伝統主義や復古主義に陥ることなく善や規範性について述べることは、かなりの勇気と知性を要求されることだと思うからです。そして、「覚悟」というのは、危険や困難を予測した上でなお自分の決めたことを行動に移そうとすることにほかなりません。だとするならば、私が過日以下のように推測したのも、当たらずとも遠からずなのかもしれません。

すなわち、規範への志向性こそが、加藤さんをして、「時代精神や体制の歪みを是正するための勝ち目のない闘い」、しかも企業社会というニッチでのパルチザン的・ゲリラ的な闘い——ポストモダン状況を生きるわれわれには、どうやらこういう小規模な局地戦しかないのだし、そこで無駄死にしようとしまいと存分に闘い抜くしかない、私は最近になって悟りはじめた次第です——へと駆り立てているのではないか、そして、加藤さんもまたその「覚悟」を背負って闘いへと一歩踏み出されたのではないだろうか、などと僭越至極ながら推測してしまったのです。もちろんこのような推測には、遅ればせながら自らのニッチを見出そうとしている私の想いが多分に投影されていることも自覚しておりますし、想像の域を出ないことを強調しておきたいのですが。

それから、『発達』に関する前・超の虚偽」というご指摘も、たいへん興味深く読ませていただきました。目から鱗にも似た認識の転換を経験したのです。「餅は餅屋」とことわざにもあるように、われわれはともすると、発達を専門とする発達理論なのだから、その発達観こそが絶対的に正しいものなのだ、などと思い込んでしまいがちです。しかし、発達理論を当の発達理論に再帰的に適用するのならば、他の諸々の対象と同じように発達という概念や現象もまた、発達段階によって異なる意味を付与されるということになる訳ですから、現代社会において権威を与えられているその価値中立的な発達観も、脱構築の俎上にのせる準備をしておいたほうがよい、と考えるのが賢明なようです（「価値中立的な発達観こそが正しいのだ」と主張する場合、その主張自体が価値判断を含んでおり価値中立的ではないので、これはやはり遂行矛盾です）。

【私の応答】

ご返信どうもありがとうございます。おっしゃるように、人間の成長の難しさは、現在の発達段階における限界性を思い知ることの難しさに一因があると思います。つまり、成長の困難さは、自己愛を超越することの難しさと密接に関わっていますね。人間は誰しも自己愛を持っているという点、そして、現代社会は自己愛を助長するような精神風土や仕組みを持っているという点において、現在の自己を徹底的に否定することは非常に困難だと思われまます。しかし、残酷なまでの自己否定がなければ、現在の自己が脱皮して次の発達段階に至ることは決してない、という事実もまた残酷ですね。

まさにご指摘の通りで、発達理論というのは、成長・発達のプロセスを明示する地図に過ぎないため、地図を眺めることと、地図上の世界を自分の足で歩くことは全く異質のものだと思います。そのため、発達理論を学ぶことによって、今の発達段階の限界が頭で理解できたとしても、実存部分での解決には何ら寄与しない可能性があります。そして発達とは、実存部分で自らの限界を痛感し、その限界を実存部分から解決していかないと成し遂げられるものではありません。

こうしたことを考えると、発達理論は、自分のさらなる成長の姿を先取りして開示してくれる特質を持ち、希望の光を与えてくるものではありませんが、段階固有の限界に直面した際には、何ら救済をもたらしてくれないものかもしれないと最近思っています。私の場合に限ると、直ちに救済をもたらしてくれないことが真の意味での救済につながり、発達理論が内包する僅かばかりの希望の光が、絶望の最中にあっても、自分が歩むべき道をうっすらと照らしてくれているような感覚を持っています。

「安住の地を見出しえず、善へ向かわざるをえないとき、人は血みどろの戦いへと駆り立てられる」という思想は、私が漠然と思っていたことだったので、明瞭な言葉にさせていただき本当にありがとうございます。」「安住の地を見出しえないとき、人は血みどろの戦いへと駆り立てられる」と考えていたのですが、少し自分の実存感覚と異なる感じがしており、「善へ向かわざるをえないとき」という表現を挟むことによって、自分の実存感覚と完全に合致した気がしました。

今回のやり取りのおかげで、徹底的なまでの善の希求とその実現に向けた実践を推し進めていこうという私の決意を揺るぎないものにしてくれたように思います。このような認識に至らせてくれたことに対して、本当に感謝しております。

184. 読者の方から寄せられた質問事項(No.8): 構造的発達心理学の新しさの所在

質問: キーガンやラスキーは構造的発達心理学に属するようですが、従来の心理学にも成人の発達を扱う理論は存在したと思いますし、エリクソンやマズローもある意味構造主義的であったようにも思われます。「ある意味構造主義的」というのは、「段階」や「階層」というタームがそういう匂いを醸し出しているという意味合いです。そういった従来の心理学と構造主義発達心理学が異なるのだとしたら、それはどういう点においてなのでしょう？

回答: おっしゃる通りで、エリク・エリクソンは成人発達理論の大家ですし、エリクソンの理論モデルを含め、アブラハム・マズローの欲求階層モデルもある意味構造主義的であると思います。

まず、エリクソンの発達理論はどちらかというと、タイプ論的(類型的)な特質を持っていると見ています。エリクソンは、年齢を基準として8つの段階モデルを提唱し、各段階には固有の発達課題があることを明らかにしました。

例えば、20歳から39歳にある人々は「親密さvs孤独」という発達課題を抱えるとされています。ここでキーガンが着目したのは、仮に30歳のAさんとBさんが「親密さvs孤独」という発達課題を抱えていたとしても、AさんとBさんが「親密さ」と「孤独」に対して付与している意味は、全く次元の違うものである可能性が存在するという事実でした。

本書の言葉を用いると、他者と単純につながっていることで安心感を得たいという意味の「他者依存的な親密さ」もあれば、お互いの価値観を確認し合った上で、お互いの人格的成熟につながるような深い交友関係を築きたいという意味の「相互発達的な親密さ」もあります。

要するに、エリクソンは、一つ一つの発達課題が持つ重層的な意味に焦点を当てることなく、年齢を基準として、発達課題の整理・分類を行ったのに対し、キーガンはそれぞれの発達課題が持つ重層的な意味にまで踏み込んで段階モデルを構築したと言えます。

興味深いことに、キーガンは「構成的発達心理学 (constructive developmental psychology)」という言葉を生み出し、自分の理論モデルを「構造的発達心理学 (structural developmental psychology)」に位置付けるのではなく、構成的発達心理学に位置付けています。

キーガンはエリクソンから多大な影響を受けながらも、単純に年齢階層に応じた発達課題を示すことに疑問を感じ、発達課題一つとってみても、個人個人でそこに付与する意味が違うことに着目し、意味を構成する機能がより複雑になっていくことを発見しました。

私たちは意味を構成(構築)する生き物であり、意味を付与する機能そのものが階層的に複雑になっていくことを捉えて、キーガンは「構成的発達心理学」と命名したのだと思います。

最後に、マズローとキーガンの発達理論の違いを簡単に述べると、それらは対象とする発達領域に違いがあるだけであり、マズローはエリクソン寄りではなく、キーガンやラスキー寄りの構造的発達心理学者(厳密に言うと「構成的発達心理学者」とみなすことができると考えています。

マズローはエリクソンのように年齢を基準とするのではなく、「欲求」を生み出す機能の質的差異に注目し、欲求を生み出す機能には階層性があることを発見しました。

同様に、キーガンは意味を付与する機能の質的差異に着目し、その階層的な発達プロセスを明らかにしたという点において、マズローとキーガンは対象とする発達領域に違いはありますが、どちらもエリクソンのようなタイプ論的な発達理論とは異なると理解しています。

【質問者の方からの応答】

この論点については、かなり専門性を帯びているためか、難解だという印象を受けました。どうやら「タイプ論的(類型的)」という言葉の意味を、私がかみあぐねていることに原因があるようです。理解がいまひとつ及ばないことを自覚しつつも、私が考えたことをまとめてみました。

まず、エリクソンにおいては、年齢という単純な基準に則って発達課題が存在するということが漠然と想定されているという印象を受けましたし、そういう意味においては、彼はその発達課題を素朴に分類したのであり、発達段階といっても、構造という複雑な機能のようなものが、その段階の奥に見透かされているのではない、というふうに解釈しました。

それに対して、キーガンの発達理論においては、加藤さんのおっしゃるように、「意味を付与する機能そのものがより複雑になっていく」のであり、その構造としての機能を見透かしつつ分析の対象としており、その機能が発達段階を垂直的かつ重層的に現象させていることを明らかにしたという点において、エリクソンの心理学とは一線を画しているのだと解釈しました。

また、マズローの欲求階層説は、その欲求を現象させているところのものが、構造と呼ぶにふさわしいような階層性を持つ機能であることから、キーガンの立場に近いというふうに理解しました。以上のような相違点を考え合わせるなら、エリクソンはさほど構造主義的ではないのかもしれない、という印象を持ちました。

すこし視点を変えると、エリクソンはもっぱら現象を記述することを意図したのに対し、キーガンは現象を現象させる機能を記述することを意図した、というイメージですが、私の解釈が正しいかどうかは、やはり自信がありません。

それから、主体の問題という観点から眺めてみると、エリクソンの心理学では、ちょっとコミカルですが、主人公のキャラクターである「主体」が「発達ワールド」(画面上に展開されるので二次元的です)で、葛藤を繰り広げつつ発達課題という様々な「イベント」を「クリアし」ながら冒険する、というイメージが頭をよぎります。

対するキーガンの発達理論では、主体はかなり希薄化し、前景に躍り出た構造もしくは機能なるものが、(主体性は幻想に近いものだったという意味で)主体とも呼べないような個体をときには捕えたり、またときには吐き出したりしながら、折り重なってうごめいているというイメージです。

【私の応答】

的確にまとめていただき、大変ありがたいです。まさに、エリクソンは構造的な機能を見透かしておきながらも、それを明示的にモデル化することはせず、発達課題を素朴に分類していったと考えられます。一方、マズローは欲求を生み出す機能に階層構造を見出したという点において、マズローの欲求段階モデルはエリクソンの段階モデルと異なり、キーガンの意識発達モデルと近いです。

ご指摘いただいて私もハッとしましたのですが、エリクソンは発達課題として生起する現象を忠実に記述していったのに対し、キーガンは現象を生み出す機能そのものを記述した、という違いがありますね。

ご提示いただいた、エリクソンとキーガンの発達理論に関するイメージは大変興味深いです。エリクソンの心理学は、まさに主体が次々と発達課題を乗り越えていく冒険のようなイメージですね。多くの方は、エリクソンが描く冒険の中で現れるステージ(発達段階)を単に八つの分類に過ぎないとみなしがちなのですが、各段階には発達課題を克服するための二つの道——発達課題を健全に克服する道と不健全に通過する道——が存在し、その後、どんどん枝分かれ的に冒険のプロセス(発達プロセス)が続いていきます。

要するに、65歳あたりで最終的な段階に到達するまでに、私たちは「2の7乗通り=128通り」の道を歩んでいることとなります。そう考えると、エリクソンのモデルは素朴なタイプ論的でありながらも、意外と複雑ですよ。

キーガンの発達理論に話題を移すと、キーガンは「意識の発達とは主体の縮小過程かつ客体の拡大過程である」と述べています。この考え方からすると、主体は「濃密な状態から希薄な状態へ」、客体は「希薄な状態から濃密な状態へ」という運動を行っていく、という思想をキーガンは持っていたように思います。

しかし、ここで問題となるのは、主体が縮小する(希薄な状態へ移行する)という意味なのですが、私はここに「自己の本質(“魂”、“内在神”、あるいは“仏性”と表現されるようなもの)」を見出しています。

つまり、主体が縮小していくというのは、自己が消滅するプロセスを描いているのではなく、自己を自己たらしめている凝縮体に帰還する、という意味として捉えています。もしかしたら、キーガンが提唱した発達段階の階梯を登っていくと、プロティノスが提唱した「一者」のような、自己を自己たらしめているものを含め、現象世界の全てを現出させる完全なるものと同一化する境地へ至るのかなと思っています。

以前、プロティノスについて調べていると、プロティノスは中世キリスト教に多大な影響を与えた、という記述があったのを覚えています。前々から気になっていたのですが、キリスト教において、自己意識に関する発達思想のようなものはありますか？

仏教においては、「自己」に関する精密な発達段階モデルが存在しており、仏典の理解と実践に励んだ先に「悟り」という境地に到達できると考えられています。人間の意識の発達という観点から見た時に、キリスト教にはどのような発達思想——「発達段階モデル」と記載することに躊躇しました——があり、信仰を深めた結果としてどのような状態に至ると想定されているのか、ぜひ教えていただければ幸いです。

【質問者の方からの応答】

エリクソン、マズローおよびキーガンの理論に対する私の理解も、そこそこの的を射ていると考えてよさそうですね。またひとつ発達理論に対する理解を深められたように思います。ありがとうございます。

「意識の発達とは主体の縮小過程かつ客体の拡大過程である」というのは、含蓄に富んだ表現であるように思われました。そして、加藤さんのおっしゃるように、その過程が極限まで推し進められていったときに人間の存在や認識はどうなるのか、という問題意識に行き着くのは、ごく自然なことだと思います。

これはもう確かめられるものならば、自身の体験でもって確かめてみるしかないのかもしれませんが。宗教伝統や神秘主義的哲学と発達理論を何らかの形で架橋するという課題も、まだ着手されて間もないようですし、ぜひ加藤さんにこの方面も切り拓いていただきたいです。

ところで、こういった発達過程の極致という問題意識も、加藤さんの著作にひっそりとしたためられているように感じられました。それは最後の室積さんと山口課長の乾杯の場面ですが、あの場面は、大胆にも著作の内容を自ら脱構築していらっしゃるようなにも思われ、「前衛的なビジネス書だなあ」と心の中でつぶやいてしまいました。

「キリスト教における自己意識に関する発達思想」ですか……、これはかなり手ごわい質問ですね。ご質問の内容との関連性がパッと思い浮かぶところでは、オリゲネス、十字架のヨハネやアビラのテレサ、イグナチオ・デ・ロヨラ、ヤコブ・ベーメ、ニコラウス・クザーヌス、マイスター・エックハルト、イヴリン・アンダーヒルなどが挙げられます。

しかしながら、現代に生きるわれわれから見れば、いずれも信仰という個別領域における発達を主題として扱っているのもあって、自己そのものの発達という観点が存在するかどうかは、疑問が残ります。とはいえ、彼ら彼女らにあつては、信仰こそが自己における主要な部分と目されていたことは確かだと思いますので、結果として信仰の発達と自己の発達はかなり重なり合う部分もあるのではないかと考えられます。

有名なところでは、キルケゴールは「美的実存→倫理実存→宗教実存」という擬似的な発達段階モデルを提唱したということもできるかもしれませんが、もともと、科学的手法には基づいていない擬似的なモデルですので、真の要素は少なく、かなり善美に傾斜した思想ではあるとは思いますが。

【私の応答】

激励のお言葉をいただいたので、神秘主義哲学と発達理論の架橋という大きな仕事にも今後着手していきたいと思っております。プラトンやプロティナスを始め、神秘主義哲学の射程は広く、牛歩のような探究速度になるかもしれませんが、その点に関して継続的に探究を行っていきたいという心積りでおります。

室積さんと山口課長の最後の乾杯シーン(pp.237-238)に言及していただき、どうもありがとうございます。実は著者として、あのシーンを一番大切にしています。ある種、形而上学的・神秘主義的な

記述をしています、そこで描かれている世界認識は、まさに私の世界認識が色濃く映し出されたものだと感じております。

もし、著作の内容を踏襲する形で締めくくるならば、「一年間のコーチングを終えたことに対する乾杯」「自分や部下が成長できたことに対する乾杯」「会社に変革しつつあることに対する乾杯」だったと思うのです。

ですが私は、著作の内容は全てリアルでありながら、虚構の産物であるという明確な認識のもと、記述内容全てを脱構築したかったのです。そうすることによって、私たちが生きることは、成長・発達を追い求めること以上の意味を持つものであり、それよりもずっと神秘的かつ奇跡的なことであるということをお伝えしたかったのです。

そして何より、私たちの固有の自己は、それを超えたより大きな存在によって抱擁されており、誕生することも消滅することもなく綿々と躍動し続けるものである、というある種の私の死生観を是が非でも伝えたいという想いがありました。いや、より正確には、死生観を伝えたいというような作為的な意図が介入する間隙も無く、その文章を紡ぎ出していた自分がその場にいたのです。

「キリスト教における自己意識に関する発達思想」に関して、様々な人物の名前を教えてください、どうもありがとうございます。特に、イグナチオ・デ・ロヨラやマイスター・エックハルトは、前々から気になっていた人物なので、彼らを中心に探究を進めていきたいと思っております。

発達理論の探究を進めていくうちに、ライプニッツの哲学を理解することが不可欠であるというところに行き着いていたのですが、ニコラウス・クザーヌスを調べてみると、ライプニッツに多大な影響を与えているそうですね。これを知って、ニコラウス・クザーヌスの業績についても調査をしたいという思いがより一層強くなりました。ご紹介いただきどうもありがとうございます。

【質問者の方からの応答】

加藤さんの著作には、加藤さんなりの熱情が秘められていたことを知って、感動いたしました。どうも私は文章から熱が伝わって来る著作なり思想家なりを好むようなのです。新約聖書学者である大

貫隆先生の『イエスという経験』を筆頭とする著作群や、パウル・ティリッヒの『生きる勇気』なども行間から滲み出る熱情を感じ取れる名著です。

大貫隆先生は一橋大学社会学部卒ですから、加藤さんの先輩にあたりますね。民間企業に数年間勤めた後、「キリスト教だなんて、棺桶に半分足を突っ込むようなところに、なぜ!？」という周囲の反対を押し切ってキリスト教の世界に飛び込んだ、というエピソードをご自身の著書で紹介されていました。『真理は「ガラクタ」の中に』に収録されている「なることはとどまること」というお話は、私のキリスト教理解といちばん近いと思っています。

パウル・ティリッヒについては“*The Courage to Be*” (『生きる勇気』)が代表作で、内容も充実していると思います。発達理論の観点から、自己肯定の源泉(≡生きる勇気)の変遷(「全体の部分として生きる勇気」「個人として生きる勇気」「この二つの勇気を超越し包含する絶対的な勇気」)を読み解くことも可能でしょうし、実際私もそういう読み方をしました。

神秘主義哲学と人間の意識との架橋という仕事は、非常に刺激的ですね。このトピックに関連して、私が哲学の解説書等を読んでいつも疑問に思うことは、後代に生きる「哲学学者」たちが果たして研究対象としている哲学者(とその認識能力)を本当に理解しているのだろうか、ということです。

例として『精神現象学』を取り上げると、ヘーゲルのいう「絶対精神」を形而上学にすぎないとして斥ける哲学学者は、ヘーゲルが認識しえた世界を認識していないのではないか、ということです。

ヘーゲルが持っていた「色眼鏡」を哲学学者のほうが持っておらず、ヘーゲルが獲得した認識の深み(高み)に達していないのだとしたら、それこそ頭上に展開する世界を自らが認識しえないからという理由で虚偽であると断じていることになり、非常に残念な態度であるといわざるをえません。

何が言いたいのかといえば、ヘーゲルの獲得した認識も、やはり「意識段階X」として存在しており、その段階においては絶対精神が認識可能となるのではないか、そして、それは実は新たなる意識段階であって、かならずしも古色蒼然とした神話的意識形態というわけではないのではないか、ということです。

絶対精神のような形而上学的概念とされてきたものや、神秘主義的な意識を発達理論から説き明かすという仕事はまことに意義深く、混迷を深める現代の思想状況に大いなる示唆を与えることになるのではないのでしょうか(かなり長期的な視点ですが)。

「語りえないものについては沈黙すべきである」ということと、「語りえないものを否定する」という態度とでは、仮に結果としての態度は同じであっても、その内実はずいぶん違っているように思われます。「語りえないものはほんとうに語りえないのか」。そういった問題も、加藤さんのお仕事の一つになるのかもしれない、などと考えたりもします。

【私の応答】

大貫先生のご経歴を拝見させていただいたところ、一橋の先輩にあたるようですね。民間企業からキリスト教の世界に移られた大貫先生の軌跡と自分の軌跡を勝手ながら重ね合わせている自分がいました。「なることはとどまること」というのは、発達理論の観点から見ても大変示唆に富んだ言葉だと思いますので、『真理は「ガラクタ」の中に』をぜひ読んでみたいと思います。

「哲学学者」の論点について、私も同様のことを思っています。自らの哲学体系を打ち出すことをせず(打ち出すことができず)、偉大な哲学者の業績を解釈することにとどまる「哲学学者」の人たちは、往々にして、その哲学者の真髄を理解するに足るだけの認識能力を持ち得ていないのではないかと思わされることが多々あります。

これは研究者としての自分自身にも多分に当てはまりますが、探究において主観性や属人的要素を完全に排除することなどできないため—むしろ、研究や探究において、その人の色や独自性が前面に出ているからこそ、その研究や探究の内在的な価値が担保されると考えていますが—、探究主体の認識レベルは探究活動を大きく規定すると思っています。一言で述べると、探究主体の認識レベルと研究の質は直結しているということです。

それを踏まえると、哲学学者がヘーゲルの認識レベルに到達していない場合、ヘーゲルが真に言わんとしていたことを掴むことは到底できないと思われまます。そうなると、ご指摘のように、哲学学者は偉大な哲学者の業績を曲解し、その真髄を自分の認識レベルまで引き下げることになってしまうと思います。

そのため、本来であれば発達段階5を凌駕する認識レベルに基づいて構築されているヘーゲルの哲学は、哲学学者の認識レベルに応じて、「段階3的なヘーゲル哲学」や「段階4的なヘーゲル哲学」等、劣化した形で世の中に蔓延しているように見受けられます。

今後、長期的な展望を持って、その道のりがいかに険しかろうとも、形而上学的な概念群を発達理論から説き明かすという仕事や語りえないものに対して果敢に切り込んでいくような仕事も進めたいと思っております。

185. 祖国を離れる日を想う:喪失と獲得の狭間で

人々は旅の途中で様々な駅を通過する。途中下車した駅から無限に広がる空間を思い思いに散策する。そして、そこからまた新しい旅を始めるのだ。

多くの旅人と同様に、私も次の駅へ向かう時期にあるようだ。渡欧の日が刻一刻と迫っている。日本に居られるのも残すところ後2か月である。

アメリカから日本に帰国してのこの一年間は、私にとって文字どおり、変容の期間であり、自分の中にある諸々のものを熟成させるための期間であったように思うのだ。正直なところを言うと、意識的な自己、つまり考える主体としての私は、アメリカから日本に戻ってくることをそれほど望んでいなかった。

しかし、考える主体としての私を超えたところにある存在者は、どうやら母国に私を連れ戻すことを望んでいたようだ。この一年間、母国の大地を踏みしめることができたこと、母国の風を感じることもできたこと、これらは日本に戻ってくることを望んでいなかった考える主体としての小さな私にとってすら、感謝の念を持つべき対象となっている。

母国が刻む呼吸と私の呼吸を呼応させる日々も終わりに近づいている。いや、母国と私の呼吸は不可分のものとして永遠に呼応し続けるだろうし、両者の間に存在する絆はもはや断つことのできないものだと強く認識している。

祖国と私の中で切り離すことのできないものを感じていながらも、この喪失感は一切何なんだろうか？
この喪失感を味わうことこそが、日本を離れるということに対する通過儀礼なのだと思う。

喪失感。オランダに渡るに際して、私は何かを喪失したという感覚と同時に、何かを喪失することによって生まれた空洞から新しい何か湧き上がってくるのを感じている。

なるほど。人間の成長・発達、確かに「喪失」と「獲得」の連続的なプロセスなのだ改めて感じさせられている。

5年前に渡米した時のあの解放感と無邪気さを味わうことはもはやできず、異質の感情がこの身に到来している様子を見るにつけ、私という人間は、確かに5年前と比較すると質的に異なった存在となっているのに気づく。

「人間は一生涯にわたって質的に成長しうる」という発達心理学の根幹にある主張は、間違っただけではないだろうし、自分の経験とひきつけて考えてみても実に腑に落ちるのだ。特に、筆舌に尽くしがたい喪失感と新しい何か自己の中で芽生えたという確固たる感覚を得たこの時期において、発達心理学の知見は骨身にこたえるものがある。

186. 遙かなるフローニンゲン

8月からオランダのフローニンゲン(“Groningen”の発音は日本人にとって困難であり、英語だとグロウニゲン、オランダ語だとフローニゲンに近い音だと思う)という街で、研究者・実践者として新たな生活を始める。8月からの2年間を通じて、自身二つ目・三つ目となる修士号—欧州の修士過程は1年間のものがほとんど—を取得する予定であるため、形式としては留学生としてフローニンゲン大学に行くことになる。

これまで日米の高等教育(日=学士、米=修士)を授かる幸運に恵まれてきたが、欧州で高等教育を受けることは初めての経験になるので、今回の留学は日米欧の高等教育を比較する上でも非常に貴重な機会になると思っている。

読者の方にとってどれだけ有益な内容になるのかわからないのであるが、「[ジョン・エフ・ケネディ大学大学院留学記](#)」と同様に、フローニンゲン大学で得られた学びや日々の体験について紹介できたらと思っている。

さて、まずは舞台となるフローニンゲンという街とフローニンゲン大学について簡単に紹介したい。紹介といえど、今年の一月に教授陣に挨拶をしに訪問した経験しか持ち合わせていないので、実際に現地に着いてから詳しく紹介をしていきたいが、とりあえず現段階で知っている範囲の情報を共有させていただきたい。

一月にフローニンゲンを訪問した時に感じた第一印象は、非常に落ち着いた学術都市であるということだ。街全体が運河で囲まれており、欧州の香気を放つ古風な建造物を豊富に残しながらも(ヨーロッパに立地しているので当たり前と言えれば当たり前であるが)、近代的な建物も散見され、クラシックとモダンが融合したような街であるという印象を私に与えた。

フローニンゲンは、アムステルダムから電車で2時間半ほど北上した場所にある。ハーグやロッテルダムといったオランダの主要都市はオランダ西部にあり、フローニンゲンはオランダ北東部に位置し、ドイツに近い(直線距離にして40kmほどでドイツの領土に入る)。そのため、フローニンゲンからアムステルダムに行くのと、ドイツ西部の主要都市ブレーメンに行くのとでは時間も距離も大して変わらない。

その他の雑学的情報としては、フローニンゲンはヨーロッパで随一の自転車利用数を誇っている。フローニンゲンの市民にとって自転車は欠かすことのできない交通手段であり、この街を「自転車の街」と形容しても問題はないと思われるぐらいだ。

次に、フローニンゲン大学について簡単に紹介したい。フローニンゲン大学の歴史は古く、今からおよそ400年ほど前の1614年に設立されている。米国で最も歴史が古いハーバード大学の設立は1636年であることを考えると、その歴史を感じさせられる。

フローニンゲン大学の立ち位置としては、アムステルダム大学やライデン大学と並ぶオランダのトップ校の一つであり、欧州の一流校の一つとされている。実際に、私は大学院入学に苦戦し、フロー

ニンゲン大学から合格通知を獲得するまでに二度不合格になっており、欧州の一流校に入学することの厳しさを身を持って感じた。

興味深いデータとして、日本における大学進学率が50%を越すのに対して、オランダにおける大学進学率は10%未満とのことである。要するに、オランダの高校生の10人に1人ぐらいしか大学に進学しないということだ。ここからも、オランダにおける大学進学や大学院進学の門戸は非常に狭いということが垣間見れる。

これまでのブログ記事では、フローニンゲン大学への留学について一切触れてこなかったが、フローニンゲン大学を志した理由やきっかけ、そして、どのような専門分野の探究を行っていくのかについて、今後少しずつ紹介していきたいと思う。

フローニンゲンの街を簡潔に紹介した動画：<https://youtu.be/kMhP3ZRbnQE>

187. 嘔吐

人間の無意識というのは実に不思議なものである。顕在意識では決して理解できない多種多様な現象が生起する場としての無意識。

ニーチェが指摘するように、深淵を覗き込もうと思った瞬間に、深淵から覗き込まれているという陰陽的關係性が脳裏に浮かぶ。無意識を覗き込もうと思った矢先、無意識からすでに覗き込まれているという感覚。

母国が悲痛な叫び声を発している。それに気づいたのは、アメリカでの4年間の生活が終わりにさしかかっていた頃だった。

私の顕在意識を通じて母国からの悲痛な叫び声を受け取ったのではなく、私の無意識を通じてそれを受け取ったのだ。どんな現象が身に降りかかったのか、今でも鮮明に覚えている。

ロサンゼルスから日本に帰国することを決意した数ヶ月前から、夢の中で嘔吐し続ける自分がそこにいた。決して胃の中から内容物を嘔吐するのではなく、大きなえずきと共に目を覚ますという夢である。

帰国する数ヶ月前から帰国後半年間にわたり、定期的にこの夢を見ることになった。

当初は、帰国することを拒絶しようとする自分を象徴した夢なのか、逆に、母国が自分を拒絶していることを象徴した夢なのかもしれないと解釈していた。実際に、夢の中での嘔吐の様子は、自己の存在から自分の内側にあってはならぬものを外に吐き出すような姿だった。

しかし、日本でこの一年間生活をしてみて、その夢解釈は正確性を欠いたものであったことが歴然と判明した。ユング的な解釈を施すと、どうやら私の無意識は、精神病理や体制の歪みに苦しむ日本の集合的な無意識と結合していたようだった。

つまり、夢の中の嘔吐は、日本が私に対して投げかけてきた悲痛な叫び声を表現したものであったように思え、それは私個人の嘔吐ではなく、母国が異質なものを体外に吐き出そうとし、自己の健全性をなんとか回復させようとする懸命な試みに思えた。

日本を覆う、このドロドロとした病的な精神風土やガタガタと崩壊しそうな諸々の虚飾の仕組み。東京で一年間過ごしながらそんなことを感じた。

特に、日本の心臓部としての役割を担う東京は、私にとってとても不健全なものに映っており、その不健全さは日本という身体全体に感染し、母国は救いを求めているような気がしてならないのだ。

こうした解釈も大変主観的なものではあるのだが、この強烈な感覚を疑うことは今の自分にとって極めて困難である。私のこれからの探究活動は、母国の精神病理や体制の歪みの治癒に結びつくようなものにしたいと強く思う。

不思議なことに東京で生活を始めて半年後、この嘔吐現象はピタリと止んだ。「ああ、自分は毒を十分に浴び切り、免疫ができたのだ」と思った。

毒と同一化しては、この毒が持つ根源と治癒方法の解明はできない。そんな考えが頭をよぎった瞬間、日本を離れるべき潮時に来たと察知した。

僥倖に恵まれる。私たちは時として、人智を遥かに超えたものからの働きかけによって人生の舵を切ることがあるのではないだろうか。

こうした働きかけに直面するとき、深く対象のない大きなものに対して、私はただただ拝むのみである。奉拝と敬拝。一介の人間として、それ以外にできることは他にあるのだろうか。きっとないだろう。

「ああ、そうか。自分は知性の発達を研究する科学者なのだ。理転しよう」

そんな通達を天上界から得たのは、20代も半ばにさしかかった頃だった。これまでの自分はおよそ理科系の科学者とは縁のない生活を送っていた。日本では文系の大学に通い、経営学を専攻していたし、卒業後はコンサルティング会社に勤め、米国の大学院でも文系の範疇で心理学を探究していた。

人間の知性や能力の発達プロセスとそのメカニズムをより深く理解したい。湧き上がるその思いを押しえることは不可能であった。この純粋な思いを大切にした場合、どうすればこの思いを成就することができるのだろうか。

非常に複雑な知性発達現象は、いつ、いかなる時も多階層的な真理を私たちの眼前に提示している。私は真理が内包する一つ一つの階層を自分の目(肉の目・知の目・観想の目)で確かめてみたい、解き明かしていきたい、と思うようになった。

複雑な知性発達現象の多階層的な真理に肉薄するための一つ的手段として、応用数学の一分野であるダイナミックシステム理論を修めることが不可欠だと思うに至った。

なぜオランダのフローニンゲン大学に留学するのか？その問いに対する簡潔な回答は、「ダイナミックシステム理論を活用した知性発達研究のアプローチを体系的に習得できるプログラムが世界においてフローニンゲン大学にしかなかったから」というシンプルなものである—ダイナミックシステム理論を脳の研究に活用することを意図した大学院レベルのプログラムは、米国ミシガン大学にもあ

るが、私の関心は物質的な脳よりも主観的な意識・知性にあるため、ミシガン大学のプログラムとは思いが合致しなかった。

こうした意思決定基準は、ジョン・エフ・ケネディ大学大学院へ留学することを志した時とさほど変わりはない。当時も、アメリカの思想家ケン・ウィルバーのインテグラル理論を体系的に学べるプログラムは、地球上においてカリフォルニアのジョン・エフ・ケネディ大学にしかない、ということを知った瞬間に、そこに行って学びを得ることを志した。

しかし、今回の留学が実現するまでの道のりは比較的長かったように思う。フローニンゲン大学は、研究大学としての地位を確立しており、大学院の志願者に対して研究に必要な事前知識とスキルを高いレベルで要求していた。

私の場合で言うと、数学と統計学の知識とスキルである。入学後に、ダイナミックシステム理論に関する体系的なトレーニングを施すという考え方のもと、数学についての事前要求レベルはそれほど高くなかったが(大学の教養課程レベル)、統計学が私にとって大きなネックとなっていた。

事実、過去二年連続でフローニンゲン大学から不合格通知をもらったのも、統計学に関する私の知識とスキルの欠如からだった。何としてでもフローニンゲン大学に入学するべく、私は米国ジョンズ・ホプキンス大学医学部が提供するオンラインの統計学講座を幾つか履修したり、英国ケンブリッジ大学に直接足を運んで統計学と統計用のプログラミング言語Rに関する資格を取得した。

今年一月にフローニンゲン大学を訪問した際には、ジョンズ・ホプキンス大学で取得した統計学に関する修了証とケンブリッジ大学で取得したRに関する資格証明書をアドミッションオフィスに直接手渡した。そうした努力の甲斐もあり、このたび無事に入学を許可されるという運びになった。

抑え難き思いに突き動かされた、これらの衝動的な自分の行動を見るにつけ、若さの際立つ非常に青々としたエネルギーを感じる。しかし、成人発達理論の観点から、あえて不遜な言い方をすると、私にとってみれば、20歳から65歳までは等しく「青年」に過ぎない。

青年期であれば、その若々しく溢れんばかりのエネルギーに抗うことなく、もう少し何かに対して果敢に挑戦してもいいのではないだろうか？未熟な己を知り、未熟であるがゆえに溢れ出す力強いエネルギー。それに従って生きること、それが健全な発達なのではないだろうか。

189. 「コトバだった」

言葉だった。私にとっては、コトバだった。

人は自らの余命を知った時、残りの生のあり方や送り方を見直すものである。自分の肉体的な余命がどれほどなのか定かではないが、日本で生活をし、日本語で精神生活を営む余命が幾ばくもないことを知る。

各人に使命というものが賦与されているのであれば、日本人としての私の使命は紛れもなく、母国に対して誓った約束を果たすことにあるだろう。

果たすべき約束のために、望むと望まざるとに関わらず、これから数十年間ほど日本を離れて研鑽を積んでいく。愚直なまでの修練を望む自分がいるのだ。

これから数十年間ほど国外で生活をしなければいけないにも関わらず、今のこの心境はいかなるものか。表層の波は激しく揺れ動き、深層は静謐な流れで満たされている。あるいは逆かもしれない。

日本を享受する余命が短くなるにつれ、この国での残りの過ごし方とあり方を僅かばかり考えた。

考えた末に出てきた答えは、これまでと何ら変わらぬ日々を悠揚迫らずに送ることであった。これまでと変わらぬ呼吸のリズムで、いつもと変わらず日々の仕事に取り組む。

もし仮に、残された僅かばかりの余命に背中を押されたものがあつたとすれば、それは言葉だった。日本語を愛し、深く味わうこと。それだった。

この一年、日本に戻ってこれたことを幸運に思う。疑義を抱くことなく、様々な出会いに恵まれ、様々な取り組みをする機会を得た。

そして何より、私にとって一番大きかったのは、森有正と辻邦生という二人のフランス文学者の作品群との邂逅であった。

彼らの全存在によって紡ぎ出された言葉に触れた時、言葉に触れたはずなのに、言葉を失う。ああ、これがまさに「コトバ」なのだ、「真言」なのだ、と悟った。

言葉の奥底へ奥底へと誘うような力を持った文章。そうした文章に触れ、彼らが言葉によって開示した深淵世界を超え、言葉によって開示されることなく「コトバ」でしか開かれえぬ世界の扉を私は開く。コトバすら超越した先にある沈黙という名の音の世界に参入する。

日本で生活する余命が刻一刻と迫った私が選んだなすべきこと、それは言葉を超出したコトバに触れることしかなかった。だが、そうした拠り所があったということ、それができたということ、ただそのことに感謝したい。ただただそのことに祈りを捧げた。

そして、私はまたいつもと変わらぬ日常に帰る。

190. フローニンゲン大学での修練:一年目のプログラムに関する概略

オランダのフローニンゲン大学で8月から何を学ぶのかについて、これまでほとんど何も言及してこなかったように思う。自分自身の思考を整理する意味でも、フローニンゲン大学で学ぶ内容について紹介したい。

欧州の大学院における修士プログラムは、一年で完結するものが多く、私はオランダにまずは二年ほど滞在し、二つの修士号を取得しようと考えている。二つのプログラムは違えど、一貫して「人間の知性や能力の発達」に関する理論と実践技法の習得に焦点を当てていくつもりである。

一年目のプログラムは、心理学修士(理系)の範疇にあり、正式なプログラム名は「タレントディベロップメントと創造性」である。このプログラムは、人間の知性や能力がどのように発達するのかを複雑性科学の観点(特に、応用数学のダイナミックシステム理論の観点)と発達心理学の観点から探究していくことを目的としている。

私の関心は「人間の知性や能力の発達」という非常に幅の広いテーマにあるが、大きく分けると、「成人の発達」と「子供の発達」という二つの領域に関心がある。

一年目のプログラムと前者の関心を絡めると、企業人がどのようにして企業社会で要求される知識や能力を獲得・涵養していくのか？企業組織は、どのようにすれば構成員の創造性を育み、イノベーションにつなげていくことができるのか？そして、このプログラムと後者の関心を絡めると、教師はどのようにすれば、子供たちの知性・能力・創造性を刺激し、育んでいくことができるのか？ということなどを探究していく予定である。

企業社会と教育界という二つの異なる文脈を対象に、個人と組織の発達に関する理論的枠組みと実務的な方法論に習熟し、それらを個人と組織の発達支援に実践的に活用していきたいと思う。

上記の説明をより具体的に説明するのではなく、あえてより抽象的に説明すると、結局このプログラムを通じて自分が探究したいことは、「卓越性の研究」「知性や能力が深みに至る道程の研究」「深さを体得するための手法の研究」に尽きるだろう。

「深さ」というのは、私の生き方を根底から支えるものであり、いかなる分野のどんな能力であれ、それが深みに至るプロセスに対して強烈なまでの関心があり、深みへ至るための実践体系を構築することに情熱を捧げている自分がある。ある種、「熱情」と形容できる湧き上がる思いに合致したプログラム。それがフローニンゲン大学で学ぶ一年目のプログラムである。

入学前から小耳に挟んでいたことであるが、オランダの大学院は米国の大学院より成績評価が厳しいそうだ。自分の経験を振り返ってみても、確かに米国の修士過程の成績評価はそれほど厳しいものではなかった——ここで私は過度な一般化を犯していると思う。そのため、オランダのフローニンゲン大学の成績評価は厳しく、ジョン・エフ・ケネディ大学の成績評価はさほど厳しくない、と解釈していただきたい——。

フローニンゲン大学の成績評価は、10段階評価を採用しており、8以上を獲得することは稀であるという記載が要綱に記載されている。成績評価が厳しいからだろうか、逆に履修クラスの数はいくらも多くない印象を受ける。

このプログラムは、60単位を卒業要件とし、そのうち半分の30単位が修士論文とチュータリング(自分が師事したい教授からマンツーマンで指導を受ける)に当てられている。この30単位を私は、サスキヤ・クネン(Saskia Kunnen)というヨーロッパを代表するダイナミックシステム理論の研究者かつ新ピアジェ派の学者に師事し、ダイナミックシステム理論と発達研究への適用手法に関する教を授かる予定である。

残りの30単位は、下記の6つのクラスを履修することに割り当てようと考えている(履修したい授業が多すぎて、6つのクラスに絞るのが難航した)。

1. タレントディベロップメントと創造性
2. 複雑性と人間発達
3. 知性・能力の発達とモチベーション
4. 創造性発達と組織のイノベーション
5. 成人発達とキャリアディベロップメント
6. 知性・能力の測定評価

上記6つのクラスに関する詳細は、また別の記事で紹介したいと思う。

プログラム紹介動画:<https://youtu.be/TjhKtB6fUzo>

191. ゼミナール受講生からの質問:スポーツと発達理論

ロバート・キーガンが提唱する16個の発達段階の特徴を見極め、発達測定の観点を獲得することを目的にした「[発達段階測定ゼミナール](#)」の受講生の方から、スポーツと発達理論に関する大変興味深い質問をいただきました。

【受講生からの質問】

ゼミナールを受講している中で、新たな疑問が浮かびました。幼少期から高齢期まで一生涯に渡り行われるスポーツという文脈において、この成人発達理論をどう捉えたらよいのかという疑問です。

企業文脈と異なり、人間のほぼ生涯を通してスポーツコーチングという現象が現れます。もちろん参加者はスポーツへの参加時期や期間は多様ですが、スポーツは学校教育よりも長く続く可能性もあり、企業よりも早い段階から人を扱っています。

ゼミナールでは、企業コンサルなどの成人同士の関わり合いが設定になっていたと思います。しかし、スポーツという領域を考えると、この成人発達理論をどう扱っていけば良いのか。

私自身とコーチということであれば、成人同士、もしくは相手が18-24歳の人間ということになります。が、コーチとアスリートとの関係を考えると、成人前のアスリートや学生を扱うカテゴリー（幼児から高校生）では、「大人たちと子どもたち」で、成人以降のアスリートを扱うカテゴリー（大学、会社人、プロフェッショナル）では、「大人たちと大人たち（新成人以降）」となります。

・特に、「大人と子ども」において、アスリートの自律性を促すこと、つまり人間性理論やエンパワメント理論から、子どもたちを独立した一人の個人として扱って自律性を促すことは、健全な発達といえるのだろうか。

・子どもを対象とするコーチは発達段階をどこまで高める必要があるのか？自律を先取りすることは害なのではないか？もしくは、アスリートという側面と一人の人という側面を分けながら、そして、含めながら捉えるべきなのか。

【私の応答】

ご質問を送っていただきどうもありがとうございます。

発達理論は、一生涯にわたる人間の成長・発達を対象とするものであるため、生涯を通じて行われるスポーツとの親和性は極めて高いと改めて思いました。多様な発達段階の方がスポーツと関わるため、身体のみならず精神を含めた健全な全人格的発達を考慮すると、発達段階ごとにアプローチを変えていくことが理想だと考えています。

特に、成人前のアスリートを対象とする場合と成人以降のアスリートを対象とする場合とでは、意識の発達段階が大きく異なるため、アスリートとの関わり方を変えていく必要があると思います。ご指

摘いただいた「自律」に関する点において、成人前のアスリートが獲得すべき「自律性」と成人以降のアスリートが獲得すべき「自律性」は、少し意味合いが違うように思われます。

例えば、10歳のアスリートに対して、発達段階4のような自律性(例:試合に向けた練習メニューを全て自分で組み立て、それを計画通りに遂行し、改善点があれば自ら改善していくこと)を求めることは、発達段階上(構造上)不可能です。10歳の子供は、発達段階3を通過する必要がある、特に「規律性の獲得」という重要な発達課題がこの時期に存在するため、その発達課題を乗り越えていくための指導が必要だと考えています。

ただし、規律性といっても、指導者から子供に指示や命令を一方的に下し、それに従わせるような意味ではなく、例えば、チームスポーツであれば、他のチームメンバーはどんな思いや考えでプレーしているのかを考えてもらう、という問いを投げかけることによって、チームの一員としてプレーや行動を行うことができるようになる、という意味での規律性を養う必要があると思います。つまり、盲目的に指導者や他者に従属するような規律性ではなく、他者の視点を取れることによって実現される規律性を涵養するアプローチが求められると考えています。

そして、チームスポーツ・個人スポーツを問わず、一つ一つの練習の意図をアスリートに考えさせる問いやアクティビティを入れることによって、段階3の規律性と合わせて、自律的に思考する下地を作ることができるのではないのでしょうか。

私の時代には、小学生や中学生を指導する方の中で、一つ一つの練習の意味や意図をアスリートに考えさせるような問いを投げかける指導者はほとんどいなかったのではないかと記憶しています。彼らが行っていたのは、上からの絶対的な指示・命令であり、そこには自ら考えて自律的に練習に取り組むような姿勢を身につけてもらう、という配慮が欠けていたように思います。

小学生や中学生において、発達段階4のような自律的な自己を確立することは不可能であっても、「自律的に思考すること」は十分に可能だと思うのです。残念ながら、私の時代においては、自律的に思考する機会を剥奪するような指導が横行していました。こうした指導は、子供達の成長・発達を支援することにつながらず、スポーツを単なる苦行に変えてしまう危険性をはらんでいると思います。

要約すると、発達段階4のような自律的な自己を確立することは、子供達にとって不可能ですし、それを指導者が強制することは、意識の発達上、害悪ですらあると思います。しかしながら、自律的に思考すること・行動することを促すことは、子供達が一生涯をかけてより成長していくために必要であり、害悪ではないと考えています。各発達段階には、それぞれの段階に対応する自律的な思考や振る舞いが存在するため、段階ごとに異なる自律性の意味に着目し、アプローチを変えていく必要があると思います。

【受講生からの応答】

「段階ごとに異なる自律性の意味」とても興味深いところです。発達理論を知る前までは、自律とは全てにおいて自律であると考えており、自律の具体性に理解がなかったように思います。アスリートやコーチの成長の中で、自律のどの側面を発達させていくかという考えを持っておりませんでした。

暗黙的に、自己が元々備わっているもので、規律や規格化によって元々備わっている自己の発達を阻害してしまう、特に、アーティスティックやクリエイティブな側面を阻害してしまうと考えていたのかもしれない。人間性心理学に依拠した考え方だったのかもしれない。

また、このことに気づけたのが、規律という言葉に鍵があったとは驚きです。私がこれまで考えていた規律とは、決められたルールや権限に従わせることであり、権利を剥奪させてしまうものでした。しかし、今回のやり取りを通じて、規律にも様々な側面があり、身に付けるべき発達課題としての規律があるのだと気付きました。ありがとうございます。

これまでの私の大学や大学院でのコーチ教育の支援実践では、アスリートの自律性を促すコーチングをすることを推奨してきました。その中で、規律を重要視してきたコーチが厳しい規律をやめて自主性を重視して取り組んだところ、指導が放任的や無関心的になることが何度か見受けられました。しばらく経つと、暗黙的に成果優先になってしまったり、成果が出なくなると自律は不必要だと考えてしまったりするケースがありました。

この場合では、我々のチームが送った自律というメッセージが画一的だったため、コーチに間違っただけの理解をさせてしまったのかもしれない。また、大学生アスリートとなると、盲目的に指導者に従ってプレーすることでパフォーマンスを高めてきた子も中にいることから、その子たちからの拒否反応

を自律性の浸透がうまくいかない理由と考えるようになりました。原因は、こちらの自律と規律の理解の低さだったのでしょう。とても反省させられるところです。段階に合わせた自律と規律の支援について、もっと学んでいきたいと思います。

自分の言葉でうまくまとめたいのですが、整理や表現がうまくいかなく非常に苦しいですね。しかし、成人前のアスリートにおける自律と成人以降のアスリートにおける自律の違い、そして、発達課題としての規律についての理解が以前よりも深まりました。発達段階から見ると非常に整理されますね。やはりスポーツやスポーツコーチングに対する発達理論が持つ意味が大きいですね。今後も学んでいきたいと思います。ありがとうございました。

192. フローニンゲン大学での修練:一年目のプログラム内容(その1)

記事190の中で一年目のプログラムの概略について紹介したので、今回は前回積み残しになっていた6つの履修科目のうち2つを取り上げて、その内容について簡単に紹介したい。

1. タレントディベロップメントと創造性

この授業を受け持つのは、プログラム責任者であるルート・ハータイである。ハータイの研究テーマは、スポーツ選手が発揮するパフォーマンスの動的な変動・変化をダイナミックシステム理論のアプローチで探究することにある。

私は、彼が博士論文で取り上げていた「 $1/f$ 揺らぎ(別名“ピンクノイズ”とも呼ばれている。これは、人間の脳波や心拍数の波に見られる現象であり、人間の知性発達プロセスにも固有の揺らぎが見られるのではと推測しており、それを調査したい)」と「複雑性ネットワーク(人間の知性や能力は、下位に存在する無数の構成要素がネットワークを構築することによって発動される。それが発達する際には、ネットワークの相互作用が鍵を握ると考えているため、複雑性ネットワーク分析の手法に精通することは自分の研究テーマに不可欠なことだと思っている)」に関する分析手法に関心があり、このクラスの中で、あるいはクラス外でそれらの分析手法について彼から教えを受けたいと思っている。

このクラスの概要を翻訳すると、「ビジネス界、スポーツ界、教育界、芸術界において、才能の発掘とその成長支援は不可欠なものとなっている。そうした背景をもとに、知性や能力の発達支援に関する研究がより注目を集めている。このクラスでは、タレントディベロップメントと創造性に関する様々な理論を紹介し、測定手法や発達支援の手法についてディスカッションをしていく」という内容である。

この概要を受けて、このクラスに対する自分なりの達成目標を列記すると以下の項目となる。

- ・タレントディベロップメントと創造性に関する多様な概念と先行研究の理解を深めること
- ・知性・能力・創造性の発達支援に関する原理とその手法について理解を深めること
- ・知性・能力・創造性の発達要因について理解を深めること
- ・知性・能力・創造性の測定手法について理解を深めること
- ・深められた理解をもとに、企業組織と教育界という二つの実務領域で具体的な実践(プロジェクトなど)を行うこと

2. 複雑性と人間発達

私が最も楽しみにしているクラスはこれである。フローニンゲン大学を選んだのは、このクラスが存在しているからだ、と言っても過言ではない。

このクラスを担当するのは、知性や能力の発達研究に非線形科学を応用している先駆的な研究者ラルフ・コックスとダイナミックシステム理論と新ピアジェ派理論に関してヨーロッパを代表する研究者であるサスキヤ・クネン(私の修士論文のアドバイザー)という二人の教授だ。

このクラスでは、近年における発達研究で着目されている研究手法「ダイナミックシステムアプローチ」に関する理論と方法について学びを深めることが目標となる。研究のみならず、ダイナミックシステムアプローチを臨床や実務の現場でどのように活用できるのか、という実践的な内容も扱うクラスである。

授業が始まり、私自身が学びを深める過程の中で詳細について説明していきたいが、簡単にどんな手法を学ぶのかについて紹介したい。

・ダイナミックシステムモデルの構築 (dynamic systems model building) : 複雑な発達現象に潜むメカニズムやプロセスを解明するために、数式モデルを組み立てる必要がある。数式モデルを組み立てる前に、現象から発達要因を抽出し、ひとまず理論モデルを構築する必要がある。複雑な発達現象に迫るために、理論モデルと数式モデルを構築することを「ダイナミックシステムモデルの構築」と呼ぶ。

・エージェント・ベース・モデル (agent based model) : コンピュータモデルの一つであり、知性や能力の構成要素の振る舞いとそれらの相互作用がシステム全体にどのような影響を与えるのかを分析するためのシミュレーション手法のことを指す。

知性や能力の構成要素を、それぞれ自律的な振る舞いをする存在 (エージェント) とみなし、それらの相互作用の状況をコンピュータ上でシミュレーションすることによって、複雑な発達現象を再現し、発達プロセスの予測を行うことなどに活用できる。

・リサンプリング (resampling) : ダイナミックシステムアプローチにおいて、様々なシミュレーションを行うことが要求されるため、母集団から標本をランダムに繰り返し抽出する必要がある。そうした繰り返しの抽出の際に行われるのがリサンプリング (再標本化) である。

・再発現象分析 (recurrence analysis — 日本語の正確な訳は不明) : 非線形的な現象を調査する時に用いられる手法であり、特に人間の知性や能力といったダイナミックなシステムは、似たような状態を繰り返し辿りながら発達していく。そうした再発現象の回数や滞留時間などを特定するための分析手法である。

・フラクタルの尺度化 (fractal scaling) : 知性や能力はフラクタル構造 (部分と全体が自己相似になっている構造) を持っている。大変興味深いことに、自然界における様々な現象は固有のフラクタル次元を持つ。例えば、星のフラクタル次元は約1.2、樹木は1.3~1.8、雲は約1.35である。自然現象のみならず、人間の知性や能力の発達プロセスにも固有のフラクタル次元があるのではないかと仮説を立てている。

このクラスでは上記の分析手法を中心に学習し、少なくとも二つの分析手法を用いてあるテーマについて研究するか、実務の現場でどのようにそれらの手法が活用できるのかをアクションプランの形として期末のレポートにまとめ上げる必要がある。

エクセルを駆使してランダムウォークモデルやロジスティック成長モデルを構築することや、NetLogoと呼ばれるシミュレーション用のプログラムを駆使して単純なエージェント・ベース・モデルを構築すること、上記の分析手法の理論的な前提を検証すること、MATLABと呼ばれる数値解析ソフトウェアを用いて再発現象分析やフラクタルの尺度化を行うこと、などがその他の課題となる。

一つ一つの分析手法は、研究者としての今後の自分にとって極めて重要であるため、機会を見つけて丁寧にそれぞれを紹介したいと思う。ダイナミックシステム理論が持つ様々なアプローチは、一見すると難しそうに思えるが、各アプローチの本質となる概念を押さえることさえできれば、実務家の方たちもそれぞれの実務領域でダイナミックシステム理論の考え方を応用することが可能だと思っている。

例えば、組織開発の際に、多様な構成員(エージェント)の振る舞いと相互作用に関して何かしらの説明論理を持つことができれば、問題発見や課題解決に有用であると考えている。また、コーチやセラピストといった対人関係の専門家にとって、クライアント一人一人の発達プロセスとその状態を理解しておくことは必須であると考えており、ダイナミックシステム理論はそうした専門職の方にとっても有益であると思う。

個人と組織の複雑な成長・発達プロセスとそのメカニズムに関する実証的な研究成果と実務の世界におけるダイナミックシステム理論の応用方法などについて、今後ぜひとも取り上げていきたい。

193. フローニンゲン大学での修練:一年目のプログラム内容(その2)

記事192に引き続き、残り4つの履修科目のうち2つを取り上げて、その内容について簡単に紹介したい。

3. 知性・能力の発達とモチベーション

元ハーバード大学教育大学院教授カート・フィッシャーを含め、様々な研究者が実証研究を通じて明らかにしているように、人間の知性・能力の発達において感情的な要素は大きな鍵を握る。とりわけ、「モチベーション」と呼ばれる感情の質いかんによって、成長・発達の速度や形は大きく左右される。

正直なところ、何かの分野において非常に卓越した能力を発揮している人たちは、もはや「モチベーション」という言葉では包摂しきれない感情に突き動かされて日々の実践活動に励んでいると思う。そうした感情は、モチベーションを超えた異質の感情にすら映る。

猟奇的、もしくは、狂氣的とも呼べるような感情である。いずれにせよ、卓越した知性や能力を育てている人の中には、熱情的な質を伴った感情が渦巻いている気がしてならない。このクラスを履修しようと考えた理由は、成長・発達の原動力となるそうした凄烈たる感情をより深く理解したいと思ったからである。

このクラスを通じて、モチベーションに関する様々な概念、理論、先行研究、実践方法に関する知識を体系的に習得していきたい。特に、発達支援者（コーチ、教師、セラピスト、コンサルタントなど）は、実践者のモチベーションをどのようにサポートすれば、彼らが卓越に至る道程を確固たる足取りで進んでいくことができるのか？どのような要因が学習やパフォーマンスを促進、あるいは阻害することになるのか？

それらの問いを中心に人間の感情について探究しつつ、実践者のモチベーションを支援し、それを育むような芸を獲得・錬磨していきたいと思う。

私たちは感情を不可避に持つ生き物であり、いかなる分野の人たちにおいても感情とうまく向き合う必要があるだろう。感情生活を豊かにすることは、実践者としての深み、はたまた人間としての深みに到達する上で必須なことだと思うのだ。

4. 創造性発達と組織のイノベーション

創造的な活動に従事すること。それは、その人の生命を最も躍動させる営みであると思う。あるいは、その人の魂・内在神・仏性をこの世界に発露させる営みであると言ってもいいだろう。

創造的な営みというのは、それくらい深い価値を内包したものだと感じている。企業の人財育成や学校教育においても、各人固有の創造性をどのように育んでいくかは重要な課題なのではないだろうか。

このクラスは、私が所属する「タレントディベロップメントと創造性」のプログラムの一つというよりも、「産業組織心理学」のプログラムの一つに組み込まれている。私の最初のキャリアは経営コンサルタントだったということもあり、また現在も日本企業と関わる機会も多いため、このクラスの内容は私の実務・実践と一番強く結びついているかもしれない。

組織の生存においてイノベーションが重要であるということは、これまで長らく叫ばれ続けている。しかし、それが仇となって、多くの組織は「イノベーション」という煌びやかな言葉にもはや踊らされなくなっているぐらい、革新することに対して疲弊している印象を受ける。

そのような疲弊した状況を改善することが第一だと思うが、逆説的にもあえて個人と組織の創造性を体系立てて根気強く涵養していくことが、疲弊感を払拭することにつながる気がしている。その理由は冒頭で述べたように、創造性というのはそもそも生命体を躍動させる根源であり、創造性を刺激し、育んでいくことは、個人と組織の生命に活力を与えることにつながると思っているからだ。

私は組織のイノベーションについて造詣は深くないが、創造性に関する既存のアプローチはどれだけ包括的・統合的なものなのか疑問に思うことがある。イノベーションを育む組織文化の醸成や制度設計は極めて重要であるという認識のもと、それら集合の内面領域(文化など)と集合の外面領域(制度など)に関する知見や実践技法は洗練されているのかもしれない。しかし、発達理論や学習理論に関する知見や実践技法は、イノベーションの喚起に対してどれほど活用されているのか気になるところである。

研究者として、このクラスを通じて創造性をどのように測定・評価することができるのかに関心があるが、実践者としては、自分の専門領域である発達理論や学習理論とイノベーションに関する既存の理論を絡めながら、組織のイノベーションを醸成する包括的・統合的なアプローチを模索していきたいと思う。

このクラスのシラバスに掲げられているように、創造性やイノベーションはとかく神秘的なものと思われがちであるが、そうした思い込みに対して実証研究や科学的な理論の光を当てることによって「脱神秘化」を行っていききたい。創造性やイノベーションを脱神秘化すること、それが現代の個人や組織の疲弊感を払拭する一つの活路になるのでは、という思いを持ってこのクラスで学びを深めていきたい。

最後に、このクラスにおける私の学習目標を列挙しておきたい。

- ・創造性やイノベーションに関する研究を進めていくための方法論を学び、その利点と限界を理解すること
- ・「知性・能力の発達とモチベーション」のクラスと関連付け、創造性やイノベーションと感情の関係について理解を深め、人財育成や組織開発に有益な実践知を獲得すること
- ・創造性に関する最新の認知プロセス研究を精査すること
- ・発達理論や学習理論の観点のみならず、組織行動論の観点からも理論や実践を組み立てられるようにすること
- ・実証的な研究と理論に裏打ちされた「創造性涵養・イノベーション支援プログラム」を構築していくこと

194. フローニンゲン大学での修練:一年目のプログラム内容(その3)

記事193に引き続き、フローニンゲン大学での一年目のプログラムで履修する6つの科目の内、残り2つのクラス内容について簡単に紹介したい。

5-1. 成人発達とキャリアディベロップメント

成人以降の発達を専門とし、企業組織と協同させていただく機会が多いという都合上、キャリアの発達と組織人の知性・能力の発達について考えさせられることがよくある。私たちの知性は生態系のようなものであり、どのような環境下に置かれるかによって、知性や能力の形が変化する。

職場環境において、どのようなタスクに従事するのか、どのような役割を担って業務を遂行するのかは、当人の知性や能力の種類や形状を決定し、その成長速度や成長の道筋までも決定づける。つ

まり、キャリア開発は、組織人の知性や能力の種類・形状や成長速度・道筋を決定づける非常に大きな役割を果たすことになる。

20歳前後から65歳近くまでの期間、企業人は特定の組織で働くことになる。多くの企業において、組織は構成員の成長・発達を育む場として健全に機能しているのか？それについては大いに疑問がある。組織が構成員の成長・発達を健全に育む場として機能すること。それを実現するために、発達心理学と産業組織心理学の知見は一役買うのではないかと思っている。

それらのことを踏まえ、成人発達(発達心理学)とキャリアディベロップメント(産業組織心理学)を架橋するこのクラスを履修してみようと思った。

5-2. 発達支援の科学: 実証的コーチングとメンタリング

上記のクラスを履修するか、こちらのクラスを履修するか決めかねている。ロバート・キーガンなどが提唱する成人発達理論とケン・ウィルバーが提唱したインテグラル理論を基盤にした発達支援コーチングの資格をカナダで取得してから、早いもので4年が過ぎた。

ジョン・エフ・ケネディ大学大学院の修士論文では、発達支援コーチングが認知的発達と社会的・感情的発達に与える効果について実証的研究を行った。それ以来、コーチングのみならず、メンタリングなどの発達支援に関する学術的な研究と実践を継続させていた。

しかしながら、ここ最近、改めて発達支援手法を科学的に探究したい、という思いが湧き上がってきた。具体的には、ジョン・エフ・ケネディ大学大学院時代の修士論文において、コーチングの前後を比較する形でその効果測定を行っていたが、コーチング全期間におけるクライアントの変化をより詳細に分析したい、と思うようになっていた。

コーチングの前後を比較するだけでは、クライアントの変化の要因やタイミングを特定することが難しい。それに対して、ダイナミックシステム理論を活用すれば、そうした変化の要因やタイミングをより正確に分析することができる。

こうした分析をすることによって、コーチングのみならず、対人支援全般に活用できる科学的な知を抽出することができるのではないかと期待している。「実証的コーチング」を冠した書籍や学術論文はかなりの数存在しているが、未だダイナミックシステム理論を活用したコーチングに関する実証研究というのは存在していないのではないかと考えている。

実際に研究を開始する前(もしくは研究の最中)に、先行研究の綿密な調査をしなければならないが、ダイナミックシステム理論を活用した実証的コーチング研究を行うことによって、当該専門領域に新たな知見を付加したいと望んでいる。

特にこの一年間は、発達心理学や発達支援に関する書籍や専門論文に目を通すことをほとんどしておらず、他分野の文献ばかりを読み続ける日々が続いていた。そのため、ここで一度立ち止まり、発達支援に関する最先端の科学的な研究成果を学び、自身の実践技術を検証・改善することに意義を感じている。

発達支援コーチングやメンタリングは、とかく自分の専門実践領域であるという思い込みゆえに、日々の実践に対する省察を怠りがちになる。そうした怠惰さを戒めるためにも、改めて自分がどんな概念や理論に立脚して日々のセッションを行っているのか、技術的な側面でどういったところを改善していけるのか、自分の発達支援はどういった実証的な成果があるのか、このコースを通じてそれらを探究していきたい。

6. 創造性の測定評価

これまでオットー・ラスキーのIDMやセオ・ドーソンのLecticaなどの研究機関で、知性や能力の評価・測定に関する専門トレーニングを受けてきた。しかし、これまで「創造性」という知性領域に関する測定を行ったことはないのではないかとふと思った。

正直なところ、創造性をどのように定義し、それをどのように評価・測定することができるのか大いに関心がある。このクラスでは、創造性の評価手法に関する知識基盤を確固たるものとするを第一に掲げ、その測定手法にも習熟していきたいと思う。

シラバスを眺めていると、創造性の評価に関しても、やはり様々な測定手法があり、創造性の定義を決定づけるパラダイムにも変遷があるようだ。そうした多様な測定手法のそれぞれの特徴を的確に掴むだけではなく、創造性を取り巻く歴史的・理論的な変遷までも射程に入れた探究をしたい。

創造性を測定する際に誤解を招きやすいのは、それが「測定のための測定」とみなされやすいことだろう。こうした傾向は、その他の知性・能力領域全般の測定に当てはまることでもあるが、あくまでも測定をする目的は、測定対象となる知性や能力を育むことにあると思っている。

すなわち、「測定のための測定」ではなく、「育成のための測定」という発想をすることが大切になる。そうした発想に基づき、創造性を育む実践につなげる測定評価を志し、実際の企業組織や教育現場で活用できるように、創造性の測定評価に関する理解度とスキルをこのクラスを通じて涵養していきたい。

195. Lectica時代の回想: 発達測定手法の開発プロセスについて

マサチューセッツ州にある人間発達に関する研究機関Lectica時代のことを少し振り返ってみた。現在、日本の企業組織向けに構造的発達心理学に基づいた人財評価システムを開発している最中であるため、Lecticaが新たな発達測定手法を開発する際にどんな開発プロセスであったかを思い出してみた。

第一に、測定したい知性領域に関する具体的な能力に焦点を当てた定性的なインタビューを実施すること。あるいは、測定対象とする能力を映し出す問いに対して記述形式で回答してもらうこと。それらの手段によって、膨大なデータを集めることから開発がスタートしたと記憶している。

Lecticaでは、リーダーシップ能力の測定に特化した「LDMA」を旗艦サービスとしていた。LDMAの開発にあたり、どのようなインタビューを行っていたのか、公開されている実際のデータを改めて幾つか見ていきたい。

下記のデータ形式は、認知的発達心理学者であれば頻繁に目にする種類のものである。これらのデータは、質的インタビューによって得られたものである。このようなインタビューでは、回答者は特定の質問を受けることによって、質問が対象とする知性領域に自らの思考を向けていく。

下記のデータは、4歳から64歳を対象に、「良いリーダーとは？」というテーマについてインタビューをしたものである。下記の四つのインタビュー事例を「リーダーシップ能力」の低い順に並び替える
とどうなるであろうか？一度立ち止まって、並び替えをしていただきたい。

事例1

インタビュアー: 良いリーダーはどんな人だと思いますか？

回答者: 列の先頭に立っているような人です。

インタビュアー: それでは、良いリーダーはどんな特徴がありますか？

回答者: わめいたり、泣いたりしません。

インタビュアー: わめいたり、泣いたりしないことがなぜ重要なのですか？

回答者: わめいたり、泣いたりすると大騒ぎになってしまいます。リーダーは大騒ぎしてはいけません。それは悪いことです。

事例2

インタビュアー: 良いリーダーはどんな人だと思いますか？

回答者: リーダーというのはそもそも、信念をより適切なものにしたたり、具現化できるような人です。そして、良いリーダーは集団が掲げるゴールに働きかけ、それを実現できるように周りの人々を支援します。リーダーシップというのはある種の奉仕であり、組織の人員が職務に意味を見出す支援をし、個人のゴールが集団のゴールに包摂されるように働きかけを行うことでもあります。

事例3

インタビュアー: 良いリーダーはどんな人だと思いますか？

回答者: 信頼することができる人です。

インタビュアー: リーダーを信頼することはどうして重要なのですか？

回答者: リーダーを信頼できれば、嘘をつく必要がないからです。

インタビュアー:嘘をつく必要がないことはなぜ重要なのですか？

回答者:なぜなら、嘘をついたらもっと嘘をつくことになるからです。

インタビュアー:わかりました。それでは、その他に良いリーダーについて考えていることはありますか？

回答者:正直であるということです。

インタビュアー:どうしてそれが大切なのですか？

回答者:正直でなければ、何か悪いことが起こるかもしれないからです。

インタビュアー:それはどういう意味ですか？

回答者:嘘をつくことがやめられなくなるという意味です。

事例4

インタビュアー:良いリーダーはどんな人だと思いますか？

回答者:ルールに従い、行動に境界線を引ける人です。さらに、前に進むためにしなければならないことをする人でもあります。良いリーダーは、人柄が良く、周りを知ろうとし、周りを助けるような人です。

上記のデータを順に見ていくと、興味深いことに気づかれたのではないだろうか？ 不思議なことに、私たちには意識の段階を直感的に掴み取る感性のようなものが備わっているのである(拙書『[なぜ部下とうまくいかないのか:「自他変革」の発達心理学](#)』でも言及している)。

つまり、ほとんどの人は上記のデータを発達の低い順に並び替えると、「1→3→4→2」の順に並び替えられたのではないだろうか。仮に上記のような並び替えをある一定の人数の人たちに依頼したら、その順番に関して常に驚くべき程のコンセンサスを持って並び替えがなされる。

さらに興味深いのは、一般の方々が並び替えた回答というのは、発達測定 of 専門家と大抵同じ回答になるのだ。この実験は実際に、Lecticaがハーバード大学教育大学院と共同して行っていたものでもある。この実験は、数百人に及ぶ人を対象に、様々な知性領域(例:物理学や倫理学など)を対象にしていたが、同様の結果が得られたのである。

ここで強調したい点は、Lecticaが提供している測定手法はまさにこうした発達段階を見極める人間の直感力をさらに洗練化させたものであるということだ。大雑把にいうと、否定することのできない人間の直感的な「発達分別能力」を測定システムとして洗練させる必要があり、その集大成がLASと呼ばれる測定システムなのである。

長さを測る物差し、重さを測る重量計、温度を測る温度計がなかった時代を想像してみたい。その当時の人間は、測定基準と測定手法がなかったため、長さ一つをとってみても、「1cm」と「100cm」を明確に区別する基準は存在しなかったのかもしれない。

しかしながら、両者は明らかに見た目が異なるため、その違いに気づいた人間が物体の長さを比較するため（並び替えるため）に物差しを開発したという歴史的経緯がある。つまり、何かしらの測定手法が開発される前に、私たちは測定対象が持つ差異にすでに気づいているのだ。

要するに、私たちには知性や能力の発達を示す特性を掴み取る直感力が内在的に備わっており、それは徐々に科学的な測定システムとして洗練化される方向に進む、ということに過ぎない。往々にして、他者の発達段階を見抜く直感力は、日常言語を介在して行われる。

子供、友人、同僚、上司と接する場合に、私たちがいかに言葉を変化させて交流を図っているかを思い出していただきたい。私たちは、コミュニケーションを図る他者がどういった意識段階を持っているのかに応じて、言語を巧みに変化させていく。こうしたことが可能なのは、まさに人間には相手の意識段階を直感的に把握し、その場にふさわしい言語表現を選択しているという理由が考えられる。

ここから導きだされるように、発達測定システムの開発の肝は、実はシンプルであり、人間がすでに持っている直感的な発達分別能力を活性化・洗練化させ、信頼性と妥当性をより担保することなのだ。

上記で紹介した会話事例を見てみると、直感的に発達の階層性に気づくだろう。それらの事例を並び替えることを要求されると、私たちは会話事例が持つ発達の特性に焦点を当てていくことになる。発達の特性とは、例えば、発話の長さ、語彙、文章の洗練性、自我中心性の度合い、視点取得能力、抽象性、複雑性などである。

回答者の一つの発話の長さを例にとってみると、それだけで「1→3→4→2」と並び替えができるだろう(ただし、実際の測定現場で字数の多寡を基準にすることはない、ということに注意をしていただきたい。発達段階と字数には幾分かの相関関係が確かに存在するが、それだけを基準に測定を行うことは正確な発達測定とは言えない)。

語彙や文章の洗練性をとってみても、「1→3→4→2」の順に並び替えができるのではないだろうか。ここからもわかるように、発達を示す言語特性はいくつも存在するのだ。しかし、100年に及ぶ認知的発達心理学の研究成果はそれらのリストを選別し、わずかな言語特性のみが客観性を伴った領域全般型の測定手法の開発に資すると提唱している。

構造的発達心理学の起源を辿ると、言語表現に現れる「構造」に着目することが大切となる。いかなる言語表現においても、必ず発話内容、つまり語られる内容が存在する。しかし、語られる内容だけを見ると、言語表現に現れる文章の長さや語彙などの非構造的なものしか見えてこない。

実際は、構造的発達心理学の考え方を採用すると、語られる内容の背後には二つの構造が存在していることが明らかになる。最初の構造は、「表層構造」と呼ばれるものである。表層構造は、ある特定領域においてのみ見られる発達の構造的な特性である。

実際のところ、ほとんどの発達測定手法はこの表層構造をターゲットにしている。こうした測定手法では、特定の領域に焦点を当て、その領域で観察される発達特性をもとに独自の測定基準を設けていくことになる。例えば、コールバーグのモラル発達測定手法では、特定のキーワードとモラルの発達段階を対応させている。

同様に、ドン・ベックのスパイラル・ダイナミクスも明示的な発話内容と価値観の発達段階を対応付けている。つまり、これらの測定システムは、ある特定の領域に見られる発達現象と発話内容を結び合わせているということだ。

要するに、それらのシステムは領域特定型の表層構造に焦点を当てているのである。優れた道徳的判断と科学的判断は異なるように、表層構造に見られる発達特性は領域固有のものである。

ケン・ウィルバーが「多様な知性領域はりんごとオレンジのように異なる」と指摘しているように、表層構造においては明確な差異が存在する。そのため、コールバーグのモラル発達測定手法をモラル以外の他の発達領域に適用することはできないのだ。

一方、LASは言語表現に見られる「深層構造」に着目していくところにユニークさがある。深層構造は表層構造よりも一段深いところに存在しており、それは発達の普遍的な特性と言える。言い換えると、深層構造は、表層構造に通底するより一般的な発達特性のことを指す。

構造的発達理論で頻繁に指摘されているように、「複雑性」や「抽象性」というのは深層構造を示す指標となる。深層構造を対象とした測定手法の優れたところは何かという、一言で言えば、いかなる発達領域も測定できてしまうということだ。

深層構造は全ての発達領域で共通する性質のものであるため、それが可能になる。例えば、上記の会話事例を深層構造(複雑性と抽象性)の観点で眺めてみると、会話事例2は明らかに会話事例3よりも複雑かつ抽象的であり、会話事例3は会話事例1よりも複雑かつ抽象的であることがわかる。深層構造に着目していけば、このような分析が可能になるのだ。

重要な点として、多様な知性領域に通底する普遍的な発達特性に着目することは、領域特定型の測定手法が誤りであるとか領域全般型の測定手法が正しいということを意味しない。確かに、LASはすべての発達領域を一つの尺度で測定することが可能であるが、領域固有の発達特性を除外しているのも事実である。

要するに、LASは領域固有の発達特性を捨象して、普遍性と客観性を担保しているという点を念頭に置いておくことが大切となる。

表層構造や深層構造に着目する発想の仕方は、ウィルバーの構造的な発想と関連していると言える。著作『アトマンプロジェクト』から始まり、“Integral Psychology (邦訳なし)”に至るまで、ウィルバーは多様な発達構造名を提唱している。

例えば、「持続段階」「移行段階」「表層・深層構造」「基本構造」などである。持続段階は、新しい発達構造が生まれた後も機能し続ける構造を意味し、移行段階は、新しい発達構造が生まれた後に

消滅してしまう構造を意味する。深層構造は普遍的な発達特性を持っているのに対し、表層構造は固有の発達特性を持っている。基本構造は、大雑把に言うと、持続的な深層構造である。その観点から考えると、まさにLASが焦点を当てているのは、ウィルバーが述べる基本構造だと言える。

196. 知性・能力発達に関するカート・フィッシャーの五つの段階モデル

過去のいくつかの記事を通じて、私が在籍していたマサチューセッツ州の発達測定専門機関Lecticaの測定手法について紹介してきた。Lecticaのいかなる測定手法も「LAS」と呼ばれる評価システムを基盤にしていることをこれまでの記事で見してきた。

LASが焦点を当てているのは、知性・能力の深層構造であり、LASはカート・フィッシャーのスキル理論をもとに構築されたものであるということを改めて確認しておきたい。フィッシャーを始め、その他の認知的発達心理学者が積み上げた実証研究に基づくと、私たちの知性・能力は大きく分けると「反射的知性」「感覚運動的知性」「表象的知性」「抽象的知性」「原理的知性」の5つの階層構造を経て発達していく。

LASは基本的に言語で表現されたものに絞って分析を行うため、対象となるのは「表象的知性」「抽象的知性」「原理的知性」の3つの階層構造である。しかし、LASの開発者であるセオ・ドーソンは、心理統計の技術を用いて、段階を移行する際に見られる特殊な発達現象を浮き彫りにすることに成功し、非言語的な行動を分析することにLASを適用することも理論上可能であると指摘している。

ただし原則は、LASはフィッシャーの理論に則って、言語で表現される知性・能力領域に的を絞って適用される測定システムであると言える。

LASが分析対象とする「反射的知性」「感覚運動的知性」「表象的知性」「抽象的知性」「原理的知性」は、どれも知性・能力発達の主要な階層構造を表している。つまり、私たちの知性や能力は、5つの階層を経て成長・発達し、それまでの階層構造が新たに再組織化されていくのである。

一つ目の「反射的知性」というのは最も基本的な階層構造であり、直感的・無意識的な反応を生み出す特徴を持つ。例えば、幼児が見せる反射的な行動は、まさにこの知性構造から生み出されたものである。

二つ目の「感覚運動的知性」は、反射的知性を一段高次にまとめ上げる形で再組織化されたものである。感覚運動的知性は、言語が生み出される前の知性であり、意識的な動作や物理的な環境への働きかけ(例えば、ドアを開ける、物を掴むなど)を司る知性である。

三つ目の「表象的知性」は、感覚運動的知性を一段高次にまとめ上げる形で再組織化されたものである。表象的知性は、頭の中での心的な想起を司る。私たちは、言語を用いることによって、事物を頭の中で想起することができる。これはまさに表象的知性の働きによる。

ただし注意が必要なのは、表象的知性は具体的な事物のイメージを司るものであり、抽象的な概念を取り扱うものではないということである。例えば、「机」という言葉を聞いて、物理的な机を想起することはできるが、表層的知性では形のない「愛」や「友情」などの概念を把握することはできない。

四つ目の「抽象的知性」は、表象的知性を一段高次にまとめ上げる形で再組織化されたものである。この知性構造を獲得して初めて、目には見えない抽象的な概念を理解することができるようになる。

最後の「原理的知性」は、抽象的知性を一段高次にまとめ上げる形で再組織化されたものである。この知性構造を獲得して初めて、理論的枠組みを構築したり、慣習的な世界観を超越した「後慣習的な世界観」を認識・構築したりすることが可能となる。

ただし、一般の成人がこの知性段階に至ることは極めて稀であり、この知性段階に到達するためには、大学院レベルの高度な教育やそれに類する内省実践が要求されることが実証研究で明らかになっている。

さらに、これらの階層構造には一連の知性・能力段階(スキルレベル)が存在している。簡単に述べると、各々の階層構造において、扱える対象がどんどん複雑化していき、その複雑化の過程をスキルレベルの増加として定義している。例えば、最初は単一の概念しか扱えなくても、知性の発達によって概念を複数組み合わせることが可能になる。

概念の単なる組み合わせから、概念的に複雑なシステムを構築することができるようになるのだ。さらに知性が発達すると、複雑なシステムを統合させるメタシステムを構築するようになっていく。

比喩的な表現をすると、最初は「点」しか捉えることができなかつた状態が、点と点を結び合わせて「線」を生み出し、線と線を組み合わせで「面」を生み出し、面と面を組み合わせで「立体」を構築していくようなイメージで知性や能力が成長・発達していく。この成長プロセスは各階層構造で繰り返されるのがポイントだ。

要するに、表象的知性の階層内でメタシステムを構築できるレベルまで知性が成熟すると、そのメタシステム(立体)が次の抽象的知性階層の「点」に変容するということだ。このようなプロセスで知性は成長・発達していき、合計で13個の知性段階(スキルレベル)が存在することをカート・フィッシャーは明らかにした。

ハーバード大学医学部のマイケル・コモンズを始めとした何人かの研究者は、それ以上の知性段階も理論的に提唱しているが、ザッカーリー・スタインが指摘するように、それらの高度な段階はまだ実証データが少なく仮説的な段階と言える。

「原理的知性段階」を超えるような高度な知性段階をお目にかかることは滅多にないが、興味深いのは、そのような高度な知性段階に到達したすると、非常に抽象的な概念を束ねるような新しい語を創造する傾向にあるということだ(例:「方法論的多元主義」や「ポスト形而上学的メタ理論」など)。ある種、異様とも思えるこうした言語表現を生み出す知性は、傑出した個人や特殊なコミュニティー(アカデミックな世界など)の中で確立される。

実際にケン・ウィルバーは、LASで把握できる知性段階よりも高次のレベルまで想定しており、それらの段階は言語超越的なレベルであるため、言語に忠実なLASの測定手法でどこまで測定できるかは探究の余地があると思う。

まとめとして繰り返しになるが、LASは言語表現のみに着目した測定手法である。LASがどのように言語表現を分析していくかという、論理構造と構成要素である概念に焦点を当てていく。具体的には、論理構造の複雑性の度合いと概念の抽象性の度合いの二つを評価する。この二つを分析することによって、言語に立脚した知性や能力の成長プロセスで繰り返し現れる階層構造が見えてくるのだ。

197. 顕現する美

—雑草とは何か？それは、その美点がまだ発見されていない植物である—ラルフ・エマーソン

突き詰めればどの知性領域・実践領域も美に行き着くのだと思う。卓越性を追求し、深みを追求した先に開けるのは美の境地ではないだろうか。

美が私たちを惹きつけてやまないのは、そこに卓越性と深みの結晶体が不可避に存在しているからだと思う。究極的に磨き上げられたもの、あるいは深遠さを感じさせてくれるものに出会ったとき、私たちは息を飲む。

美にはそんな力がある気がするのだ。

私自身、知性や能力の成長・発達プロセスやそのメカニズムを探究しているが、それは結局のところ、美の追求なのかもしれないと思う。美を具現化した人物や美へ至る道筋を研究することによって、多くの人たちが自分の中にある独自の美の種子を発見し、それを顕現させていくことにつながるような研究と実践を行っていきたい、と心の奥底で願っているのかもしれない。

しかし、その実現に向けて厳しい現実が突きつけられている。グローバリゼーションという名の「スタンダード化(standardization)」。グローバリゼーションは不可避に標準化を孕む。

過度なグローバル化が進行するにつれ、深さが蔑ろにされ、全てが均一的な平準物にならされていく……。まさにケン・ウィルバーが警鐘を鳴らしていたフラットランドの進行だ。

グローバル化が進む条件には、確かに標準化がつきものであり、それにより、モノやサービスが効率的かつ大量に生産され、それらが世界規模で効率的に行き渡るようになるのかもしれない。しかし、量的拡大と効率性を追求する標準化には、本来異なる深さのものが画一的に平準化されてしまう危険性があることを忘れてはならない。

何よりも、深さの象徴である美というものは、決して標準化・平準化されてはならぬものだと思う。あらゆることか、美までもが標準化・平準化されつつあるという危機に現代社会は見舞われている。こうし

たスタンダダイゼーションの結果として、私たちは各人固有の美を花開かせることを妨げられているような状況下に置かれていると言える。

私の探究テーマと探究心を支える思想は、昨今のグローバリゼーションの風潮とは真逆のものだろう。探究者としての孤独があるとするならば、それは時代精神との乖離、あるいは対立から生まれて来るものかもしれない。

時代精神と逆行することになろうとも、真っ向から対立することになろうとも、私は美を追求したいと思う。

198. アメリカの国家諜報機関で重宝されていた発達測定手法の質

記事195に関連して、若干細かな論点であるが、LASという発達測定システムを心理統計の観点から評価すると、どのようなことが言えるのかを簡単に紹介したい。結論から言うと、セオ・ドーソンやザッカーリー・スタインによる長年の実証研究が示しているように、LASは測定者間の信頼性やアセスメントの妥当性を高いレベルで確保している。

特に、測定者間の信頼性——同じ回答を分析して、どれだけ同じ測定結果が得られるか——がどれほど確保されているかはアセスメントの質において重要な点であり、もし測定者間での合意がなかなか得られないような測定手法である場合、それは測定システム上に何かしらの欠陥があることを示している。

熟達したLASの分析者であれば、知性発達の一つの階層構造に含まれる4つの段階を見分ける際に、およそ97%という高い測定者間の信頼性を持っている。Lecticalに参画した当初に私が受けたLASのトレーニングでは、熟練の分析者と少なくとも85%の合意率を確保することが要求されていた。

ドーソンやスタインは、LASと様々な発達測定手法を比較する検証研究を実施してきた。例えば、ローレンス・コールバーグの測定手法(道徳的発達)、ジェリル・アーモンの測定手法(善に対する認識力)、ウィリアム・ペリーの測定手法(認識論的理解力)、カレン・キッチナーとパトリシア・キングの測定手法(内省的判断力)などとLASを比較した。

比較の結果、LASはそれらの領域特定型の発達測定システムが対象とする領域にも適用可能であるということがわかったのである。つまり、LASで計測されたスコアは、他の測定手法で計測されたスコアと対応させることが可能であるということだ(構造的発達心理学の研究者にとって、これは非常に大きなインパクトを持つ発見事項であった)。

これが可能になるのは、究極的にどの発達測定手法も必ず共通の性質を測定しているからである。ドーソンが提唱するように、この共通の性質こそ、まさに「潜在的な発達構造(記事195を参照)」と呼ばれるものであり、それは階層的な複雑性と言い換えることができる。

また、測定者間の信頼性に加え、ドーソンは「ラッシュモデル(Rasch Model)」を活用しながら潜在的な発達構造の存在について実証的な証拠を提出している。ラッシュモデルとは、社会科学の領域において客観的な測定手法とは何かを解明するために開発されたものである。

ラッシュモデルは既存の統計手法とは異なる特徴を持っており、それは理論モデルがデータに適合するかを評価するのではなく、データがモデルに適合するのかを評価することにある。Lecticaでは、データを見事に記述する最善の理論モデルを探すことに主眼を置くのではなく、収集したデータが客観的な測定基準に適合しているかどうかを評価することを行っている。

つまり、心理統計の専門家が集うLecticaでは、測定手法そのものを評価するという試みが同時に行われていたのである。こうした試みの下、各測定手法が抱えるアセスメント項目の難易度を評価するとともに、多様な測定手法を横断的に比較することも行われていた。

実際に、ドーソンはラッシュモデルを適用しながら、LASのスコアとコールバーグのスコアを比較(二つの測定手法を比較)したり、LASとコールバーグとアーモンのスコアを比較(三つの測定手法を比較)したりしていた。特に注目に値するのは、三つの測定手法をラッシュモデルを使って比較した際に、それらのシステム間に相関係数が0.92存在していたことである。統計学上、相関係数0.92は、極めて高い相関関係を示す。

こうした調査が基になって、ドーソンは潜在的な発達構造(階層的な複雑性)の存在を提唱するに至ったのである。

上記を要約すると、LASは信頼性と客観性が高い測定手法であるということだ。LASは単に他の測定手法と比較して信頼性が高いというだけではなく、領域特定型の測定手法が間接的に測定する潜在的な発達構造を直接的に測定することが可能なのである。

発達測定に関してこうした質の高さを誇るLASが、米国の国家諜報機関(NSA、CIA、FBIなど)で積極的に活用されていたのは実に納得できる。

199. 愚直なまでにただひたすらに

—学ぶとは、自分の中で何かが変わることである—上原専祿

愚直なまでにただひたすらに。この5年間、毎日継続してきたことがある。それは、起床直後の20分間の身体運動—ヨガと太極拳を統合したような脱力と柔軟力を意識した身体動作—と30分間の座禅である。その後の15分間の英語の音読。美を体現した書籍や学術論文を15分間ただひたすらに筆写するということ。

各実践の所要時間に変動はあったものの、これらをこの5年間、愚直なまでに継続してきた。継続の成果は、日々目に見える形で顕在化してくれる親切さを持ち合わせていなかった。成果を期待して実践すればするほど、成果が現れないのではないかと思わされるほどであった。

しかし、それらの成果は予期せぬところで思わぬ形で姿を現わす。特に、自分を惹きつけてやまない美を体得した文章をひたすら書き写すことは、自分にとって非常に価値を持った修練であったように思う。

振り返ってみると、この5年間で日本語においては、井筒俊彦氏の主著「意識と本質」を二度ほど全文筆写し、松永太郎氏の翻訳書「存在することのシンプルな感覚」も二度ほど全文筆写した。これは自分の日本語を鍛えたいという思いよりも、米国在住時に私の深層意識が時折感じていた、日本語に対する強烈な渇きを癒すための実践だったのかもしれないと振り返ってみて思う。

また、英語に関する筆写行は、日本語の量と質を遥かに凌駕していたことに気づかされた。英語に関しても様々な書籍や論文を筆写してきたが、米国在住時代の後半からは、ただ一人、私が敬愛

する生粋の発達科学者カート・フィッシャーの学術論文だけをただひたすらに書き写し続けてきた。日本にいる今も毎朝である。今日もだ。そして、明日もだ。

上述した日本語の書籍に対しては、ただ音読をした後に、その文章を書き写すということしか行っていない。そこには、その文章構造や使用語彙を解析してやろうというような作為的な意図もなければ、そうした文章を自分でも紡ぎだしたいというような思いもなかったように思う。何かあったとすれば、それは精巧かつ重厚な日本語に触れたいという極めて純粋な思いだった。

一方、英語に関しては様相がまるっきり異なる。私は、最初から一貫して、いつかフィッシャーのような学術論文を執筆するということを強く意識していたように思う。もちろん、私はフィッシャーが論文の中で創造する美に共感・感銘を受けているのは間違いない。ただし、それを味わうだけで留まらない強烈な思いがあった。

自分も作る。自分も創造する。そうした思いに突き動かされ、私は5年間、フィッシャーが論文中に使う語彙、コロンやセミコロンの打ち方、接続詞を挟むタイミング、一段落中に盛り込む他論文からの引用数とその配置など、解析的にフィッシャーの論文を読み込み、フィッシャーの鼓動を感じられるレベルまでただひたすらに筆写を続けてきた。

今でも鮮明に覚えている。フィッシャーが37歳の時に、心理学の学術誌の中で最も権威のある「Psychological Review」に投稿した論文“A Theory of Cognitive Development: The Control and Construction of Hierarchies of Skills (1980)”を読んだ時、自分は一生かけても同様の論文を執筆できないと思った。

富士山の麓にいる感覚のようだった。富士山の麓にいる時、遥か彼方にある頂きに到達することなど不可能ではないかと思えてくるものである。フィッシャーの論文を毎日書き写す日々を開始し、一年ぐらい経過した時、これまで見えなかった富士山の頂が見えるような瞬間があったのだ。

しかし、それでもフィッシャーの論文と同じレベルのものを書くのに、最低でも20～30年かかると思っていた。フィッシャーの論文と同じ水準のものを書くことなど不可能だという思いもやはり交わりながらも、毎日彼の論文を書き写し続けてきた。

すると突然、7年後あたりに同質の論文を執筆できる可能性が見えてきたのだ。まさに光が差し込んできたのである。これは大きな体験であった。手に届かないと思っていたものが目の前に近づいてくる感覚、と形容してもいいだろうか。

いや、全くもって目に見えなかったものが突然視野に飛び込んで来る感覚だろうか。いずれにせよ、確固たる思いと愚直なまでの実践によって、大いなる跳躍の瞬間がやってくるということを身を持って体験させてくれた出来事であった。

ああ、これが能力の成長というものなのだろう。

200. キャリア段階ごとの職業人の自我と能力の発達

幾分気が早いのであるが、記事194で取り上げた「成人発達とキャリアディベロップメント」というクラスでの小研究テーマとして、「キャリア段階ごとの職業人の自我(identity)と能力(skill)の発達」を取り上げたい。

被験者を募るのはまだ先のことであるが、幾つかの専門職(例:経営コンサルタント、教師、セラピスト、コーチ)の方々にご協力いただき、彼らのキャリア変遷の中で、職業人としての自我と能力の発達の推移をインタビュー手法を用いて研究したいと考えている。

キャリアの変遷に応じて、職業人としてのアイデンティティにも何らかの質的変化があるだろうし、職業人としての能力においても質的変化があるだろう。両者の質的変化を辿りながら、アイデンティティの成長率と能力の成長率との関係性について調査をしてみたい。

例えば、経営コンサルタントという専門職を例にとり、コンサルタントとしてのキャリアを振り返り、それを自伝的に語っていただくことを通じて、キャリアの変遷過程を自らで定義してもらおう(例:「前期修練期」「後期修練期」「葛藤期」「熟成期」など)。

その後、キャリアの変遷過程に応じて、職業人としての自分のあり方はどうであったか、つまり職業人としてのアイデンティティはどのようなものであったかを語ってもらおう。合わせて、アイデンティティの変容を促した出来事やきっかけについても質問し、成長要因を抽出していきたい。

ここで注意が必要なのは、職業人としてのアイデンティティがいくら優れていても、具体的な実務課題を遂行する能力が伴っていないならば、専門職としての価値を創造・提供できないということだ。そのため、アイデンティティのみならず、キャリアの変遷過程に応じて職業人としての能力にもどのような変化があったのかを語ってもらう。

被験者に自分の専門職で核となる能力を一つだけ抽出してもらい、それを自らの言葉で定義してもらう。そして、その能力に絞って、キャリアの変遷過程の中でどのような成長があったのかを教える。ここでもアイデンティティの発達と同様に、能力の変容を促進した触媒となる出来事やきっかけについて質問し、成長要因を探っていきたい。

こうしたインタビューを通じてデータを取得し、職業人としての自我の発達に関しては、ロバート・キーガンの主体客体理論を活用して評価・分析をする。一方、職業人としての能力の評価・分析には、カート・フィッシャーのダイナミックスキル理論を活用する。

職業人としての自我(アイデンティティ)を被験者がいかように語ろうとも、キーガンの主体客体理論を用いれば、分析作業はそれほど難解ではない。しかし、能力に関しては、被験者によって命名も定義づけも異なるであろうから、一見すると分析は困難に思える。

例えば、あるコンサルタントは、核となる能力を「課題発見能力」とし、独自の定義をするかもしれない。また、別のコンサルタントは、「関係構築能力」を核たる能力として抽出するかもしれない。

独自の命名・定義づけをしたとしても、被験者ごとにその能力の質的差異(階層構造)を分析することがこの研究の焦点であるため、統一的な尺度でそれらの能力領域を測定することができれば良い。この要求事項に応えてくれるのが、フィッシャーのダイナミックスキル理論のような領域全般型の測定モデルである。

結局のところ、この研究で明らかにしていきたいのは、キャリア変遷と職業人としての自我・能力に関する発達プロセスの関係性と変化のメカニズムである。幾人かの被験者を募り、これまでの職業人としての人生を振り返りながら、キャリアの変遷と自己のあり方と能力の成長を省みる機会にさせていただいたら幸いであるし、私としても上記の関心事項を明らかにする研究につながれば有り難い。